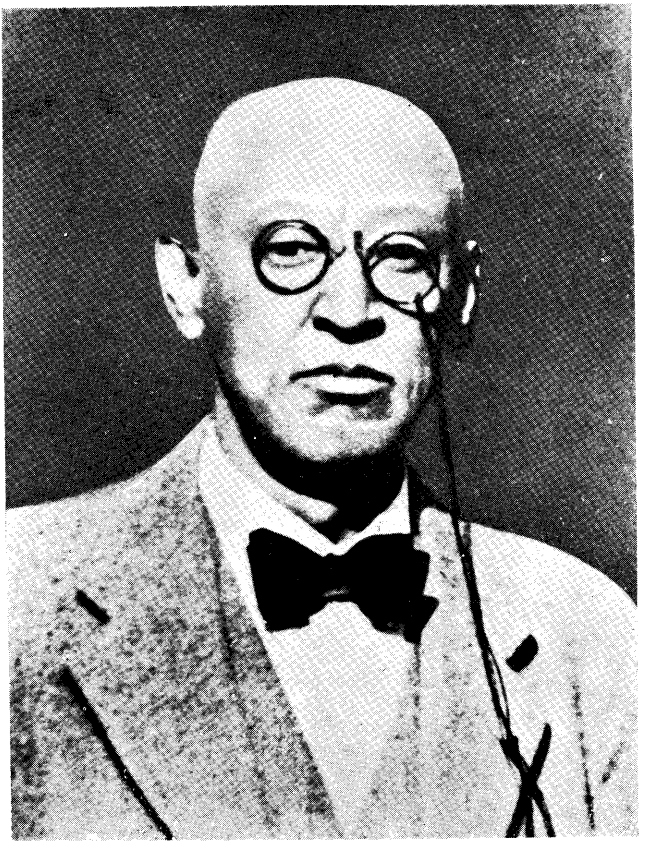
文藝と批評

第三號

石割松太郎先生追悼號

早稻田大學國文學會



石劉奏公

石割松太郎先生の逝去を悼む

先生は曩に本會より、機關誌「國文學研究」の創刊さるるに當り、編纂顧問となられ、爾來今日に至るまで、論文の審査其他に、絶大なる教導を賜つたのである。我國文學會が基礎愈强固に、斯界に於ける一大威力として今日あるを得たのは、實に先生が指導者の一員として、熱心に盡された賜であつて、深く感謝するところである。而も學會は今後益先生の高敎を仰がねばならぬ秋に際し、溘焉として訃に接したのは洵に哀しき極み、學會を擧げての恨事である。然しながら、徒らに先生の長逝を悲しんでのみゐることは、學者としての先生の靈を慰むる所以ではない。先生の學問に對する精神と研究とは嚴然として學會に現存してゐる。この先生の遺された偉大な精神を本當に活かす爲に、その深き研究を今後の學究への基址たらしめることが、今や學會にとつて最も必要である。我々は先生の溫顏に再び接することの出來ない今日、永劫の生命としての先生の魂の中に可及的に深く永く浸つて、その眞底を探攷したい。かくして極めた泉より溢れる幾多の流れは絶ゆるときなく、軈て洋々たる大海の水となつて、國文學といふ大地輿を全く圍繞するの時あるを固く信ずるのである。こゝに學會は幽明境を異にせられた先生を悼み、在りし日の先生を偲ぶとともに、今後も加護と激勵とを惠與さるるやう願望しつつ、追悼號を靈前に捧げ、在天の英靈を慰め奉らんとするのである。

昭和十一年九月

早稻田大學國文學會

文藝と批評　第三號　目次

石割松太郎先生追悼號

寫眞と署名……
追悼辭……
略歷……

遺稿『德川文學講座』綱要……石割松太郎　1

追悼錄

戲場年表の筆寫……中井浩水　8
逝ける石割松太郎君……日高只一　9
石割さんと私……矢吹二六　11
都新聞時代……伊原青々園　12
大每時代の石割さん……深江彥市　14
奇談以上の彼……長谷川伸　16
石割大盡……平山蘆江　18
石割松太郎君を悼む……高安月郊　20
純情の人石割君……山田清作　21
筐の手紙……高安吸江　26
凡てに意外なりし石割君……五十嵐力　29
石割松太郎君を憶ふ……吉江喬松　30
石割松太郎君……窪田空穗　31
前掛姿の石割さん……河竹繁俊　33
五段配當律と荷帳……三田村鳶魚　35
我が幼友達そして教導者……曾我廼家五郎　38
石割先生の追憶……豐竹古靱太夫　39
石割先生のこと……吉田榮三　41
石割先生を憶ふ……山田二郎　42
追慕の道を行く……猪飼叔藏　44

葬儀・追悼法會（大阪）・納骨の記……47
『石割先生謦咳集』抄……猪飼叔藏 49

國文學研究第六輯批評

村井順「若紫の卷研究」……鷲原見利 50
暉峻康隆「西鶴町人物論攷」……佐藤喜一郎 55
大崎正「發生的見地にかける短歌の本質」……横山青娥 56
國分保「用明天皇職人鑑考」……角田一郎 57

映畫寸評……61

好色一代男再見……竹村次郎 62
江島其磧の父と祖父の存在に就いて……工藤武富 67
編輯後記……

表紙題字・秋艸道人

石割松太郎先生略歴

略歴

石割先生名は松太郎、眉葉（少青年時代）猿人（壯年時代）と號せしことあり。
明治十四年一月二十四日　父七左衛門、母小春の長男として堺市柳之町に生る。當時家は酒造を業とす。
堺市錦小學校、同殿馬場高等小學校を經て大阪府第二中學校（現大阪府立堺中學校）に入學
明治三十三年三月三十一日　同校卒業
上京、東京專門學校（早稲田大學前身）高等豫科に入學、其後學制改革あり
明治三十八年七月十五日　早稲田大學文學部文學科を卒業
卒業後、出版また國書刊行會の仕事に從事せしことあり。
其後、日本新聞、都新聞、帝國新聞、大阪新報等を經て
大正六年　大阪毎日新聞社內國通信部に入る。
大正十四年十月九日　同社調査課長に進み
翌十五年六月一日　同社內職制改革により學藝部調査課長となる。
尙在社中は專ら劇評を擔當、又「サンデー毎日」創刊に際しその主腦部として參加、現在の大衆文學、並びに作家紹介に多大の功績あり。
昭和二年十月初旬、腦溢血のため一時重體なりしも、二ヶ月の靜養後幸にも再起するを得たり。
後、病の爲職を辭し
昭和七年十一月二日　母校の聘により、早稲田大學文學部講師に就任、主として國文學科に於て江戸文學の講義を續け、逝去の日に至る。

著作

○『人形芝居雜話』――昭和五年十月、春陽堂より刊行。
○『人形芝居の研究』――昭和八年十月、更生閣より刊行。
○『祥瑞の研究』――昭和九年三月、寶雲舍より刊行。
○『近世演劇雜考』――昭和九年九月、岡倉書房より刊行

右著書の他、雜誌其他への發表、新聞紙上への執筆に至りては枚擧の遑なし。此他、發兌元堺屋石割書店をつくりて出版『演藝月刊』を創刊して主宰『浪速叢書』の刊行參與等斯界への業績多し。

病狀經過

石割松太郎先生はかねて腎臟病を持病とせられ、年來血壓高きため養生を續けてゐられた。本年春新たに喘息を發せられ、一時快方に向はれたが、五月二十六日矢來町の新宅へ御轉居の以前より風邪のため再發轉宅と同時に臥床せられ、河西主治醫診斷の結果、萎縮腎、心臟肥大、喘息、風邪の併發、重態なる旨を告げられた。六月五日慶應病院內科に入院、西野科長、原主治醫の努力、近親、友人、學生等の看護も効なく、更に尿毒症を併發、衰弱愈つのり、二十八日午後八時半腸出血、翌二十九日午前一時四十五分、瀧子夫人初め近親、友人門下生等に守られ、遂に逝去せられた。享年五十六才。逝去後遺骸は直ちに牛込區矢來町十七番地の自宅に安置された。

『德川文學講座』綱要

石割松太郎（遺稿）

「近松講座」綱要

一、机上の讀み物としての「近松」でなく、絃にかゝり人形が動く「淨るり」としての「近松」を講ずるを主要なる重點としたい。隨つてそれは操史と聯關しての「近松」である。一面操史における操りの發生期、發達期を說きつゝ近松の作品を讀み、豊竹座の作者紀海音その他と比較して講義を進めたい。そして操の完成期、爛熟期は、近松の後徒が主として近松の改作、飜案を上演して、民庶に迎合し、舞臺と床との技巧を專らにした時代で、近松後曳時代として、こゝに說納める。

一、舞臺藝術の生命は、いつもこの順序で進み發達をしてゐないかと思ふ。必然的に生るべき胎生期があつて、發生、發達の兩期を大成する偉人、乃至その藝を成長さすに足る根幹の人物が出て完成期は、次の時代に殘される。我が義太夫節を語り物にする操りもこの常道を採つて、近松と竹本義太夫とを根幹の人物とした。そして操の完成は眼に訴ふる「人

形」の吉田文三郎であると言へるのは、舞臺藝術の社會性である經濟的に支持する大衆性がなくては舞臺藝術は成立しない。「近松」を講ずるにこゝに亦重點をおきたい。

一、舞臺藝術の完成期は二代目乃至三代目にあると思ふが、假りに近松に幾年の壽命を籍すところあつても、完成期に達しない、發達期が續くか、中斷さるゝのみであらう。卽ち舞臺藝術が技巧を主とした「見世物」に墮する一線を、近松は越えなかつた。近松とて隨分大衆的に迎合した作者であるが、この一線を越えなかつたところに「近松」の眞生命がある。「近松」を講ずるにこの點も忘れてはならぬ。

以上三點を綱領とし、この主旨にて、一年假りに五六十時間を、大略左の如く配分して講じたい。

〔第一〕近松の習作時代――京在住宇治嘉太夫付作者時代、幷に狂言作者時代（延寶――貞享）

一、この古淨るり時代までの操の概說――當時の人形遣ひ方と舞臺の樣式――當時の「節」の概說。

二、近松の早い頃の作として、能樂の影響の最も多い時代――例へば「葵上」の節章（ふしのしやう）（加賀掾正本）と謠「葵上」のゴマとの考察。

三、京派と大阪派の語り物の相違と淨るりの特長。

四、宇治加賀の芝居から、何故義太夫が太夫元の竹庄と手を携へて脫退大阪へ下つたか、これに參加した近松の事情と當時の京阪の操り界の趨勢。

五、近松の大阪移住、竹本座櫓揚における近松の位置、作品として「出世景淸」の檢討。

――（以上十時間）――

〔第二〕心中物に染筆するまでと「曾根崎心中」時代（元祿元——寶永元）

一、世話物への傾向と歌舞伎の「傾城買」の狂言。

二、この期に注意すべき「蟬丸」と「天鼓」との二作品——前者は題材の上から操史に關係の多い三井寺持分近松寺の「蟬丸宮」と說經節の關係——人形遣ひの二大流を爲す百太夫系統と蟬丸系統との對立——近松門左衞門と近松寺との關係——「天鼓」は近松自身に自信自負の厚かつた趣向だけに十分近松を知る上に檢討したい——歌舞伎と偶人劇との舞臺の相違と一致點——後の「淨るり一代男」の出版と近松。

三、當時の「心中」の狀況と世相——心中作品に關して豊竹座との關係。

四、「曾根崎心中」の成立。

五、豊竹若太夫の櫓揚と義太夫のツレ語り竹本賴母の位置と近松の關係。

六、竹本賴母の「節事」が近松にどう影響したか——乃至近松は賴母のために何を書いたか。

七、この期の竹本座の人形遣ひと豊竹座の人形遣——卽ち辰松八郎兵衞と藤井小三郎の對比。

——（以上十五時間）——

〔第三〕人形出遣ひから筑後沒するまで（寶永二—正德四）

一、竹本筑後隱退と竹田出雲の擡頭事情。

二、この出雲は世說の淸定、千前軒の出雲とするは誤り、二代外記出雲でこの人と近松の關係——隨つて竹田近江、出雲の代々と道頓堀の興行界の消長に觸れる。

三、人形出遣ひと「節」の關係――作柄に及ぼす影響――「用明天皇職人鑑」の舞臺面の檢討。
四、この期に於ける世話物の諸作――心中物と世相――近松が美化した「相對死」。
五、近松と都一中との關係は？――若太夫、賴母の節、語り口と筑後のそれ等の比較――近松の文章と筑後の語り口。
六、筑後歿した當時の竹本座の各太夫と近松と座本出雲の關係、併にその各自の態度。
七、竹澤權右衞門以來の三味線の位置と、想像さるゝ三味線の「手」。

――（以上十時間）――

〔第四〕政太夫櫓下から近松の歿するまで（正德五―享保九）

一、政太夫の櫓下拔擢事情と近松の作品。
二、近松の文章と若太夫の節――付り政太夫の藝の系統――政太夫を得て近松はその作品に眞生命が吹込まれた（主として世話物、時代世話物の）――この意味で節から見た近松の作品。
三、「國性爺合戰」の成立。
四、「國性爺合戰」の人形と「獅子ヶ城」の節と「九仙山」の景事――卽ち三段目の政太夫と道行の賴母。
五、この頃「間（あい）の狂言」を全く上演せず、偶人劇のほんとの本格的興行の狂言の配列となつた劇場の事情と世相――近松の脂の乘切つた作品としての「國性爺」の檢討とその影響。
六、近松圓熟期のこの期における「壽の門松」「天の網島」「女殺油地獄」「心中宵庚申」――政太夫を得てこれらの作が生きた所以――然し興行としての大衆性が段々と薄れ行く所以――藝術品と大衆性――この一方豐竹座の「北條時賴記」（享保十一）が擡頭した所以――「讀む」作品としての近松の圓熟期と興行淨るりの舞臺のテキストとの一致點と背離す

る點とを近松の晩年の作に檢討。

——（以上十五時間）——

〔第五〕近松歿後の操りと人形の劃期的の發達（享保十—寶暦九）

一、近松の改作飜案と舞臺技巧。
二、人形の機械的工風と發達と。
三、竹本座の吉田文三郎と豊竹座の藤井小三郎の活動。
四、人形三人遣ひへの發達と爛熟期へ。

——（以上五時間）——〆めて五十五時間

「西鶴講座」綱要

一、西鶴の述作年代、天和二年から元祿六年までを假りに約十年と定め、從來の假名草子を生きた現實の社會へと接觸せしめたとは、何人も言ふところであるが、その西鶴の現實社會は、譬へ武士を對象としても「町人」の色彩があり、諸國を描いても「大阪」の色が殘る「大阪」と引離して西鶴を考へられない事。

一、その「大阪」とはどんな「大阪」である？——大阪の人情、大阪の風俗、大阪の魂、大阪の信仰を生々しく西鶴が描いたその「大阪」の町人は江戸の町人、諸國の町人とは違つて居る。これは「大阪」の成立から考へられねばならぬ。

大阪が豊臣の領知であつた時には、伏見と政治上密接な關係を持して、堺の富有町人が、まづ大阪へ移住を慫慂された。が、その堺の富有な町人はどうして富有になつて居た？

一、次に元和の夏の陣の後、大阪が豊臣の領知でなくなつた直後松平忠明の領知となり、忠明は伏見から又富有町人を呼寄せて、大阪市政に力を致した。「大阪」の土臺を爲した人は、豊臣氏でなくて實はこの松平忠明である。この忠明大阪にある事五ケ年で和劦郡山へ轉封された。そして德川の直轄領となり城代として、最初に來たのが、伏見の城番内藤信正であつた。

一、大阪と伏見と堺との關係は、地理的に隣接し或は淀川に依つて繫がれたる以外に、如上市政上亦密接な關係が結ばれてゐた。卽ち元和以後の大阪町人は浪速土着人と伏見、堺の移住人によつて主として成立して居た。

一、そして大阪も堺も伏見も等しく直轄領卽ち所謂「天領」であつて、上に藩主がない。又江戸の如く將軍の膝下でもなかつた。

一、斯くの如くして「町人」として主從の關係を絶えて持たなかつた大阪町人――こゝに大阪特有の自由な信仰と個性と人情と風習とが生れざるを得なかつた。その上西國一圓の物資の集散地は大阪であつたから、自から「富」は大阪に蒐つた。大阪にとつては諸國大名は華客であつて、支配階級でなかつた。

一、人間一生の運命を可なりに支配する「富」の消長と、上に立つ權力なり勢力が、個性同樣「大阪」を支配する。且江つ戸幷びに諸國の庶民が感ずる各自の支配階級と、大阪人が感ずる城代の支配とでは可なりの逕庭があつた。

一、この元和一亂後、旣に六七十年を經た天和貞享元祿に至つて、新興の「大阪」の地に「西鶴」が生れざるを得なかつた。

一、この大阪特有の大阪の理想が作つた文學は西鶴を措いて外にない。卽ち西鶴の高唱するところは、大阪町人の高唱しようとする理想であつた。

以上の意味において「大阪」の成立を市政上、信仰上、地勢上から、堺、伏見と共に講述したる上

〔第一〕成金物語としての「日本永代藏」を以て西鶴の「金」の信仰を講述。

〔第二〕人情と肉慾に對して「好色一代男」「好色一代女」その他に依つて述說し、所詮西鶴に「戀」が無い。隨つて元祿期の「大阪」に「戀愛」はなかつた事。それが「元祿の大阪」であつた事を講述。

〔第三〕西鶴晩年の作として「世間胸算用」の重要なる位置を講述。

〔第四〕西鶴の見た初期の歌舞伎——劇評家としての彼と評判記の述作、及び遊廓、若衆の風俗を「男色大鑑」その他の諸作の內に述べ。

〔第五〕最後に淨るり作者としての西鶴——「暦」の一作を吟味したい。

——(各項約十時間宛)——

石割松太郎先生追悼錄

戯場年表の筆寫

中井浩水

二人ともまだ早稲田にゐた頃、ある年の夏、休暇の間に上野の圖書館通ひをした、その間だけ池の端のある家に下宿して南瓜ばかり喰はされたことは今に忘れない、石割君は關根只誠さんの『戯場年表』の稿本を手寫、私は浮世双紙を毎日〳〵一と月ばかり缺かさずに出かけた、石割君は紙と墨池と筆とを持つていつて驚くべき根氣であの大部の稿筆をスツカリ寫してしまつた、書寫に使つた筆が二十本ばかり『これも一つの記念やな』とホツとしたやうな顏をして石割君はその禿筆の一と束を机の上にのせて眺めてゐた、『戯場年表』の筆寫がすむと今度は古い狂言本――圖書館藏の――を渉獵してゐた、『戯場年表』はその後、手放してしまつたらしいが、狂言本渉獵の古いノートは殘つてゐる筈である。

あの池の端の一ケ月ほどの夢のうちに珍談が一つ、毎晩湯に入つて飯を食つてからゴロ〳〵してゐる間に『清元でも習ひに行かうやないか』といつたやうなことをどちらが云ひ出したともなく議が纏まつた、早速近くの繪双紙屋へいつて買つて來たのが『梅柳中宵月』例の十六夜清心、あの稽古本を各々懷中に及んで二丁ほどの處にある清元何文字の門口までいつたがどうも入り憎い、あすの晩にしよう

とそこらを散歩して歸つた、それから三晩ほど出かけたがとう〳〵格子戸へ手をかけず仕舞ひでよしてしまつたことがあつた、全く遠い夢、かれこれ三十餘年前の話。

逝ける石割松太郎君

日高只一

石割君は明治三十八年早稲田大學文學科――修業年限三ヶ年の東京專門學校が發展して、豫科一年半、本科三年の「早稲田大學」となつた其最初の文學科――の卒業で、私の同級生である。が學生時代は君と特別の親交がなかつたし、君も寡言、沈默の方であつたので、君に對する印象も記憶も殆んど遺つてゐない、併し、君が學生時代から讀書が好きで、研究心の强かつたことだけは記憶してゐる。其頃吾々は同クラスの有志數名が集つて、坪內先生指導の下に、讀書會なるものを組織し、月々余丁町の坪內先生の宅に會合して、當番の一二名が、新しく讀んだ文學書の紹介、研究發表などをやつて、會員相互の批評なり、先生の批判なりを仰いだものだ。會員には吉江喬松、小川未明、高須梅溪、不破小士郎、森岡格雄、西本波太、西山勇、片岡鶴雄、石野元藏等の諸君と筆者の外に石割松太郎君がゐた。最近余丁町の坪內先生舊宅の庭から早大演劇博物館に移植された月桂樹は此讀書會の者が先生に對する謝恩の意を籠めて植ゑ遺したものである。

卒業の年であつた、右讀書會の連中が坪內先生を擁して、小金井に花見に出かけた。其時、筆者は卷紙、筆、墨汁を持參して、櫻花の下、記念の爲め、坪內先生を初め、一同に寄せ書をして貰つた。中で石割君の書いた句に

花千里小袖の幕に大太夫　　眉葉

といふのがある。眉葉は君の雅號である。君は在學中から江戸文學に興味を持つてゐたので、一寸した句にも淨瑠璃に

の中にでもありさうな文句を持つて來たと思はれる。

卒業後君は新聞界の人となり、軈て大阪毎日新聞に入るや劇評に辛刺、嚴正、縱横の筆を振ひ、大阪劇界のいかものをして戰慄せしめた。殊に歌舞伎劇の批評に在學當時からの研鑽、蘊蓄の凡ならざるを思はせるものが多かつた。後年君が月々自費刊行、缺かさず惠んでくれた演劇雜誌「演藝月刊」の如きは愈々其感を深くせしめるものが多々あつた。

先年早大國文科に黑木、山口兩君が相次いで亡くなり、江戸文學の權威を失つた時、石割君は、聘せられて、其後を襲ふことゝなつた。其際君が提出した「近松講座」綱要と「西鶴講座」綱要とを見て、愈々君の研究眼の非凡なのに驚かざるを得なかつた。なぜかといふと、日本に於ける在來の近松研究者の多くは字句の訓詁的詮索とか考證とかに終始するか、さもなければ文學的研究で能事終れりとするかであつた。イヤ今猶其範圍を出ない者が大部分であらう。ところが石割君に至つては更に其範圍の上に出で、近松の舞臺的研究に進んだ。君が「近松講座」綱要の冒頭に

「机上の讀み物としての「近松」でなく、絃にかゝり、人形が動く「淨るり」としての「近松」を講ずるを主要なる重點としたい」

と明言してゐるのは當に演劇研究の最後、最高段階である舞臺的研究を以て、近松研究の眼目としたものであつて、實に石割君の卓見であると思ふ。素より近松研究に於ても一般演劇殊に古劇研究と同じく、訓詁的研究、文學的研究の何れも缺いてはならないが、舞臺的研究を以て主眼としなければならない。でなければ、前二段階の研究も時に其正鵠を逸することがあらう。

又石割君の「西鶴講座」綱要も亦君の文學的研究の非凡を語つてゐるものである。といふのは君の文學研究法は單なる鑑賞的のものでなくて、社會的殊に經濟的關係の下に文化を見、同時に文學を見るといふ最も新しい文學の發生的研究法を以て其出發點としてゐるからである。

君はこれだけの研鑽、卓見、抱負を以て、學徒をも導き、斯道にも貢獻しつゝあつた。否其研鑽、卓見、抱負の十分なる發現は寧ろ今後にあつた。而も君が其卓見と抱負との根柢をなし、其研鑽の主な部分を成すものは君が一生

の大事業、操史の研究であつて、それもやがて纏められて世に出るべき筈であつたのに、不幸君の逝去に依つて阻まれて了つた。實に日本演劇研究上大痛恨事である。

石割さんと私

矢吹二六

石割さんと私が知り合つたのは木村さん（現大朝社會部長）と同期に早稲田の校門を出たばかりの時分で、齋藤松洲畫伯の御紹介であつたのですが、木村さんは間もなく妻君を娶られましたが、石割さんは獨身であつたので、直きに親し味が深くなりました。飯田町の下宿を引拂ふ時にも或る事情があつて私が主人に面會して仕末をつけたことなど覺えて居ます。當時は出版に志したやうで、尾崎咢堂先生のものや數種の小單行本を發行して居ましたが、失敗のやうでした。出版界の奇人金尾文淵堂の主人とも親しくして居ました。

其後新聞人となつたのは日本新聞を振出しに、後都新聞社へ轉じたのです。同僚の平山蘆江さんや故伊藤みはるさんや、社外では小山内さん岡村柿紅さんなどと、私が先棒になつて遊び廻つた面白い話も多くあります。伊原遲塚兩先生には隨分御世話になつたことを聞いて居ます。一時は伊原先生の御家を拜借して居ました。青山墓地を通り拔けて遊びに行つたことも度々ありました。市川左團次丈と富子夫人と結婚する二三日前、當時の下谷名妓中川家榮さんが中々利口者で實を吐かないから、私に眞の實否を確めてくれと賴まれたやうな笑話もあります。

大阪での記者生活の最初は浪花橋南詰に所在した新聞社（三重縣代議士經營）で主幹の結城禮一郎氏が退社された後へ招聘されて東京を去つてからで、未だ新橋驛が東京の終點の頃です。何か記念號祝宴の餘興に、東京から歌澤芝

派の宗家芝金とお清さんを送つたことがあります。後大阪新報社に暫く居つて、大阪毎日新聞へ入社したのです。これで僕も滿足が出來たと話したことがあります。然し一方ならぬ苦心と努力を要したやうです。出張しても通信費を惜まず、電報の語數なども成可く多くを使つて詳報せよと命ぜられたことは、費用を制限されるよりも苦しいと染々述懷したことがありました。偶々用事で社へ面會に行くと時計を見ながら用談をしたものです。かくも細心で責任感の強い人でしたが、私と同じやうにとかく人を毛嫌ひする癖がありました。或時私が天下茶屋の住家へ一月餘り滯在したことがありましたが、二三軒先に住む木村さんへも往來しないやうでした。

大阪の二大新聞の記者は何かと幅が利くので、面白い生活を追つて記者としての全盛時代であつたらうと思ひます。酒は中々呑み、醉へば北や南と遊び廻つたものです。喧嘩早い人でしたが、艶福家でもありました。前齒を失つたのもこの時分の醉狂からの禍痕です。末に病を得てからは全く禁酒して肉食を絶ち、時々出京して共に食事をする時でも、よくもかくまで徹底した養生が出來るものだと感心した位です。病氣の爲め大毎は休職となり、二年の期間も過ぎて、大阪時事新報の客員であつた時までは京阪を往復して共に仕事をやりましたが、大學へ納まつてから數度訪れたが面會の機會を得ず、危篤と聞いて病院へ再三見舞つたが意識不明であつた。最後に見舞つた早朝空室になつて居たので愕然としました。臨終までに私の名が耳へ通じたらうかと、今もそれが思ひ殘になつて居ます。

都新聞時代

伊原青々園

遲塚麗水君が社會部長をして居る頃であつたが、急に記者が一人だけ要るので、小生が石割君を推薦した。その前

から知人であつたのみならず、當時「日本新聞」の記者として眼ざましい活動をして居たので、この人を引抜いて見たいと小生は思つたのである。麗水君もその前に石割君が「思軒全集」を出版した關係でよく識つて居たから、すぐに自分で交渉して都新聞社へ連れて來た。

それが何時のことだか覺えないが、明治四十二年五月の社員の勤務割を見ると、石割君の名前がなくて、翌四十三年三月のを見ると、名前が出て居る。だから石割君の入社はこの間のことに違ひない。で、石割君の擔當は外勤で、それも警察廻りなど一定の場所がなく、何か聞込があれば出動する、卽ち遊軍であつた。その遊軍として石割君は「日本新聞」と同じやうに活動した。石割君が書いた特種によつて「都新聞」は頗る賑はされた。

石割君の提供した原稿には際物の走り種もあり、また其うでない連載の讀物もあつた。後者で今も忘れないのは、當時新橋の狹斜で、名妓と呼ばれた洗髮お妻の一代記である。これだけは後に單行本として出版されたが、それに本名を出さないで、「都新聞記者巳黑子」としてある。巳歲生れだから、そういふ匿名をつかつたのだと思ふ。この單行本の出版年月が明治四十三年七月とある。君の在社した時代がそれでも推定し得られる。

石割君が歿した翌日、右の事を思出して、手元にある「洗髮お妻」を久しぶりに讀返して見たが、今ごろ讀んでも中々面白い。いろ〳〵な男を手玉に取つたのが、「一代女」のやうで、しかも「一代女」よりもスケールが大きい。何しろ相手の男は、伊藤公のやうな大政治家、頭山滿のやうな志士、古賀吉のやうな俠客、羽左衞門のやうな名優、そんな人たちばかりだからである。それに小生が此の著述に興味を感ずるもう一つの理由は、鄕里で中學生だつた時代に、英語を敎はつた先生の若夫人が卽ちお妻の前身である事を、石割君の記事ではじめて知つたからである。

石割君は右の通り社會部の記者として活動する片手間で、文藝面の原稿もよく書いたが、當時文藝面の主任は後に「大菩薩峠」を書いて有名となつた中里介山君で、何うした譯か、石割君の原稿を一つも紙上に載せなかつたさうである。そのうちに中里君が社會部長に轉じたので、その

下に働くことを快しとしないで、この任命が發表されると卽夜大阪へ急行し、同地の新聞社へ轉勤すべく交渉して「都新聞」を退いた。それは四十四年十月であつた。

その頃の社會部には、出動した車代を餘計につけかける弊があつて困つたが、石割君だけは金錢にキレイで、かつ同僚に尊敬された。「上方に生れた江戸つ子だ」とハタからいはれて居た。

大毎時代の石割さん

深江彦市

「大毎時代」の石割さんを追悼號に書く間際になつて私は少し當惑した。書けば書くことは相當にあるばかりでなくその人の人間的な或る一面は傍から見る目にも華やかなものだつた。併しこの時代の石割さんは、どの姿勢でゐる時が眞實の石割さんであつたか捕捉しにくいのである。性格がそれほどに複雜だつたわけでもないのに、私には場合によつて石割さんの姿が異つて見える——たとへば社で仕事をしてゐる時は几帳面な事務家であるが、日沒後酒席などで見出す石割さんは、およそ几帳面の反對に徹底したもので、しかもあの不自由な舌端から皮肉と漫罵が交錯して連發され、どうかすると誠に勇壯な行動——多くの場合に擬勢に終るのであるが——を起してそこに侍べるところの女どもを蜘蛛の子の樣に追ひ散すのだつた。今一つの姿は、劇關係の、それは主として仕打側とか俳優やその番頭などに對する細心で丁寧な挨拶ぶりである、これはきつと本人も意識してやつてゐたのでないかと思はれるほどなのが今日でも私の記憶に幾つかの例をとゞめてゐる。多分新聞紙上で鋭くこき下す罪ほろぼしといふ考へでゞもあつたらう。或は用意の周到さが多少ともそんな風にさせたのかも知れない。

そのころ薄田泣菫氏（學藝部長）の下で石割松太郎、名越國三郎、渡邊均、それに私ほか數名のものが「サンデー毎日」の編輯をやつてゐた。ちやうど白井喬二氏の「築城篇」だつたかゞ當てた後に、引きつゞき同氏の「新撰組」を卷頭に置くことになつた。何でもないことだが小說を雜誌の第一頁に持つて行つたのは、或はこれが皮切でなかつたかと思ふ。石割さんはこの時一つの相談を持出した。それは「新撰組」の上に「大衆文藝」といふ肩書をつけてはどうとか云ふのだつた。そのころは新講談と云つてゐたのである。

「大衆文藝」には私は賛成でなかつた。大衆といふことが如何にも不熟で生硬な感じがしたので「新講談で結構」といふ意見でゐたのだが、石割さんは熱心にあの手この手で私の偏見を打破するのに努めた。遂に私はその熱心に讓歩させられてしまつた。そこで薄田部長にこのことを報告すると、薄田さんは笑つてうなづいてゐられた。

「實は白井君が自分の力作に是非さういふ名稱をつけてみたいと度々手紙で云つて來たので、白井君の云ふ通りにしたかつたゞけなのだ」――これは大衆小說が極めて通りのいゝ文藝の一科目となつて、あべこべに昔幅の利いた純文藝の影がうすくなつた時に初めて石割さんが打明けたことだつた。

同じころ、平山蘆江、長谷川伸、前田曙山、國枝史郎、吉川英治氏など〳〵の持込原稿を石割さんは親切に引受けて抽出にしまひこんでゐた。伸氏は既に明かに今日の傾向を示してゐた、これは自然と創作（今日で云ふ純文藝の代りです）に移つてゆくべき作風だなどゝ私はひとりぎめにしてゐたが、その他の諸氏はどうも（ごめん下さい）ありがたくない原稿だと思ひ、殊に英治氏のは石割さんの庇ひやうが過度だと考へたので、私は露骨に吉川氏の名をリストから消して石割さんに見せたこともある位だ。それでも何かの原稿が少しばかり足りないとき「これはどうだ」と石割さんが持出して見せてくれる中にきつと吉川氏の原稿がまぢつてゐた。この時分の分擔は新講談石割、創作渡邊挿繪名越、計畫深江だつたので、石割さんからすれば何彼につけて私を賛成させる手數を要したのである。あの短氣

で頑固な、どつちかと云へば我儘でもある石割さんが、よくそれを辛抱して、そして思ふ存分に切り廻しにくい中で、よくあれだけ多くの大衆文藝作家を或は育て、或は掘出し或は引き立てたものだと感心するのである。

家庭の石割さんは、不幸にしてその良半が三人まで交代した。この點では眞に氣の毒な人だ、けれども第一の人は糟糠の妻で石割さんが大毎勇退後病歿され、次の夫人は石割さんが浪々中を意とせず困窮を目蒐けて飛込んだ程の人だけに石割さんを知ること最も深く、且つ敬し且つ愛し、その全心身を投出して石割さんのものに仕切つてゐた。この夫人が昨年六月牛込原町で逝いた時、石割さんは自分で筆をとつて「音容玲瓏大姉」と戒名をしるした。松尾太夫の愛弟子で常盤津をよくしたのである。

私が石割さんを知つて後、その家庭のいかにも明るく、いかにもたのしく見えたのは原町においてこの夫人と過した一年そこ〳〵の月日であつたらう。過去の華やかさを背景にして、晩年のこの落ちついた家庭生活が夫人の死によつて果敢なく崩れたのは傷ましい限りである。

三番目の夫人を迎へた前後の石割さんは、もう大毎時代の石割さんではなく、そして餘りに脆くたふれて行つてしまつた。

奇談以上の彼

長谷川仲

私の知つてゐる早稲田出の人で、爲すべきことがあつて、早く世を去つたものゝうち、もつとも惜いとおもつてゐるのは、先には林田春潮、近ごろでは石割松太郎である。

林田春潮のことは、近年、私どもの間でも、語ることが稀になつた。私は春潮と交りが至つて淺かつた。たゞ、新

聞社で落合つて知合ひになつてゐた程度で、正しくは交遊關係がなかつたといふ可きだらう、ではあるが、春潮が新聞を廢めて、早稻田かどこかの圖書館にはいり、そこで『日本美術史』を著はす、さういふ事だけは知つてゐたので、日ごろの見聞や何かから、春潮の美術史は、決定的な好著になるに違ひないと思つてゐただけに、その死はむざむざと討死したといふ、憾みを、強く抱いたものである。それから年月は大分に經つて、石割松太郎死去と聞いて、林田春潮の死によつて受けた以上の可惜さを感じた。

石割松太郎とは同じ新聞社で落合つたのではなかつた。彼の友人平山蘆江、故伊藤みはるを介して、私は知合ひになつたのである。平山伊藤程に私は、刎頸の友らしく振舞ふことが出來なかつたが、それでも品川あたりへ亂醉して、若氣の遊行をともにした事などもある。さういふ頃の彼の印象は新聞人に過ぎなかつた、我も彼もの新聞人、一騎討の新聞記者合戰ならば、敢へて劣るとは實に思つてゐなかつた。

さういふ頃の石割松太郎は、延いて彼が『サンデー毎日』創刊ごろの編輯にあたり、平山私などに原稿を依頼し――その頃平山は既に今日いふ處の大衆作家だつたが、私はさうでなかつた、それにも拘らず「食ひ溜め原稿の必要があるといふので、動員されて、向ふ見ずにかき立てさせたそれを彼はいゝ加減な署名を私の依頼でつけて、『サンデー毎日』にのせたその一ツが『天正殺人鬼』で、菊池寛氏の注意を惹き、遂に私をして作家生活に入らせる動因をつくつた。彼は始め、私の要求した約束を享れ、何びとにも私が私であることを漏らさない、かういふ事を斷じて強守してくれた。それでないと新聞社に勤めてゐる私の、首があぶないと思つたからである。菊池氏が下阪して『天正殺人鬼』の筆者はだれかと訊いたとき、彼は約束通り私の名を漏らさなかつたと聞いてゐる。そこは菊池氏で、忽ち大毎の會計で聞きあはせ、稿料の送り先によつて、私であることを知つてしまつたさうである。

彼は南海電車の驀進する前に突喊して「石割松太郎を知らんか」と、見得を切つて停めたといふ如き奇談の主であるが、そんな奇談の面白さより、近年の私には彼が、畏敬

すべき熱情漢で學者であることが、面白くおもへた。最早昔の彼ではなくなつてゐた。片々たる劇評にも彼は、蘊蓄を底藏して毒筆をふるつた、毒筆の底に、彼の演劇愛護の精神が一貫してゐたことは云ふまでもあるまい。

彼に來た死は、どう考へても早きに過ぎた。彼には爲すべきことの準備が既に出來てゐたのであらう。

石割大盡

堅縞の糸織にお納戸色無地の博多帶、鐵無地の羽織を着流して、紺キャラコの足袋、柾の通つたぢかばきすつきりした姿で吉原遊びから藝者遊びへと移つたのが石割松太郎の三十歳頃だつた。羽左衛門の顏だちを梅幸の身體にくつつけたやうだと、花柳界の人は批評した。吉原では五郎藏さんといふ仇名を呼んだ。稻辨の皐月といふ花魁と相當深くなつてゐたからで、これを註釋すれば、默阿彌ものの芝居に出る御所五郎藏の情人は皐月といふ傾城だからである。

其頃、彼も私も都新聞社に勤めてゐた。ある年の正月、私が新聞記事の材料をつくる爲めに寶舟賣に變裝したら、彼れは前以て神田講武所の待合に客となつて待ちうけ、おたから〳〵と觸れ賣りしてゐた私を呼び込んで驚ろかし、その儘吉原へ繰り込んだりした事がある。

かういふ遊び方を好んでゐたので、遊びの支拂ひがむやみに嵩ばつた。泉州堺の實家から卽非の卷物をこつそり持出し、

「これ賣りとばして遊んでやるねん」などと云つてた事もあつた。

酒は一升酒で、好きな女を手近に侍らせ、取卷の藝者を何人となくよびあつめて好きなものを奢つてやつたり、藝者が江戸前でないと云つては罵倒したりするくせがあつたが、いふ事する事に罪がなく、金づかひが荒かつたので女

平山蘆江

たちには好かれる質だつた。近世の遊客津の國屋藤次郎、鹿島清兵衛、光村大盡などの遊びを眞似てゐた氣味がある。名妓ぽんた、あらひ髪お妻などの業蹟を好んで語りもし、書きもした。

だから最初の妻女お玉さんは元新橋の名妓に數へられた人であり、向島に待合をひらいてゐる時石割と相識つて、石割の寛濶ぶりに惚れ、盡せる限りを盡して大分の年上だつたにも拘らず、到頭石割を良人とし、石割の爲めに世帶の苦勞もしつくし、石割に死水を取つてもらつて冥目した。

後妻の德惠さんは大阪在住の折、新町で相識つた人で、これ亦、石割と共にさんざんの苦勞をし、此上なしといはれるほどの手厚い介抱を石割から受けて幸福な若死を遂げてゐる。

筆に毒を持つてゐた通り、花柳界の女に向つても毒口を利いたが、毒口で喝破したあとは必らず何かで酬つてやる事を忘れなかつた。

大阪の帝國新聞で氣に入らぬ事があり同志八人と共に退社した時などは痛快に石割松太郎の全貞を示してゐる。

自分の責任ある編輯を終り降版すると共に石割が机をとんと叩く、それを合圖に八人は机の上に立上り、隱しておいたビールを拔いて乾杯し、萬歲を三唱して一列縱隊の退社行進で、編輯局と廊下を練りまはり堂々と門を去つたといふ。

其社の社長吉弘何某が石割と會見して、あれほどの熱心で我社を育てあげてゐた君が一旦の怒りから、弊履の如く我社を捨てる心持が判らないと云つたら、石割は皓然として答へた。

「僕は生れつき密柑と蜘蛛がきらひです。今度きらひが一つ殖えた。それは吉弘何某卽ちあんたです。理由はそれだけや。さよなら」

そして自分に殉じた八人の身柄が片付くまで全責任を持ち、住居のないものは半年あまりも自分の家で養つてやるばかりでなく、毎日酒席を儲けて流連するといふ風だつた。其時の借金には遺がの石割も後に弱つた弱つたと云つて苦笑ひをしてゐた。

石割松太郎君を悼む

高安月郊

君に逢つたのは大正の大震災に大阪へ遁れて行つた時である。然しそれまでに君の方では私の作も見、「東西文學比較評論」を自費で出した時も、これを發行する者が無かつたとは本屋の恥辱だとまで云つた。十三年の春私の「福神舞」を中座で出して、鴈治郎が主人公をつとめた時も、同情のある批評をした。それから時々「大阪毎日」、「サンデー毎日」「映畫と演藝」などに寄稿を需めたので、文藝に關する雜文をよせた。

然し君の批評は知る、知らぬにかゝはらず、いつも寛大ではなく、情實に拘泥しなかつた。新聞社を出て、自身で「演藝月刊」を出した時は、筆鋒の鋭どさ、誰も彼も猛烈に攻撃、驚いた程であつた。

私は三年で歸東、君は昭和七年東上、同十月「藝術殿」で「明治劇界功勞者號」を出すについて、私の事を君に囑したので、改めて私の經歴を聞いたから、一通り話して、「東西文藝評傳」など材料を渡したが、それでもまだ裸になつてないと云つた、然し古來自傳と云つても創作ほども眞實の底はあらはさぬものである、私の代表作をそれまでの中では「魔の曲」であらうとはどう見たのか、兎に角最も理解のある一文を寄せた。

其後「祥瑞の研究」を送つて來た、此趣味あつたとは知らなかつたが、こまかく話す折はなかつた。人形芝居には最も精通で好材料を多年蒐集の樣であつたが、完成しなかつたのは最も惜むべき事である。

去年一月私の妻が歿した、君とは面識がなかつたので通知をしなかつたが、君は大阪で聽いた、丁度君の先夫人もなくなつて、遺骨を高野へ納めに行く途中、それだけ心から同情して悔み狀を送つて來た。

今歳の春私は大阪へ行つたついで、西宮に薄田泣菫君を訪ふと、丁度そこへ來合はせたのは君、夕方まで話して一緒に歸途につき、夙川から電車に乘ると、先年より木立が殖ゑたなどゝ話しあふ中着いたのは寶塚であつた。大笑して乘りかへ、梅田へ着いた時は全く暮れて面も向けられぬ烈風、後の笑話と思つたら、それが最後、後の哀話となつたのである。

いつであつたか、君は薄田君に私の事を語らせて筆記したといふ。それを公にしなかつたのはどうしたのかと泣菫君が云つたが、私が死んでから出す方が好いと思ふのだらうと云つたら、其私も、語つた人も存在して、書いた人が先へ逝うとは、人生の不定、然も命數は前定してゐるのでないかと、つくづく思ひまはすのである。

純情の人石割君

山田清作

石割君の批評の筆はギロチンの如くに對手を戰慄させたが、それは十數年前萎縮腎を宣告され酒をやめた彼が、心境の變化を爆發させた噴火に過ぎない。噴火口の底深くいつもやさしい熱涙とゆかしい純情を充溢させて居たことは親しく彼の指導を受けた學生諸君のよく知る所であるが、私は彼の天眞流露の手紙によつて更にそれを確證したいと思ふ。

相識の初めは明治三十八年彼が國書刊行會の編輯部に參加した時であつた。その後大每社に居た彼が故片上伸氏と宇治の旗亭で大衝突を演じ、郵稅十五錢といふ長い片上罵倒の封書を私に寄せてから、手紙の往復は月に幾度と頻繁になつたが、昭和七年春彼が最も苦境に在つた頃の數通が、幸ひに見當つた。其一は第一內君お玉さんを失つて六日目に出たもの。

拜啓。御芳情のあふるゝ御手紙、御弔詞に、御心を籠められたる御供へに接し、有難く存じます。九日夜十二時落命、一夜をボンヤリとして十日朝、やるせなき心持を懷いて御ハガキ大兄へ宛てゝ一葉を認めました。一切の通知を略し、時事新報へ廣告と記事を賴み、凡てをこれを通知に代へました。處が時事の編輯局で各社へ通信してくれたので、大阪版へ出た爲め、不本意であるやうな本意のやうな盛大な葬儀を十一日正午から二時まで自宅の告別を致しました。

病氣は宿痾の萎縮腎で心臟を痛めた處へ、氣候の變化に接して突發的に喘息を發病、尤も舊冬三度（十一月廿日、十二月一日、十二月四日）も發病、二十分ばかり喘息で苦しみ候もすぐ治り、ケロリと致す事喘息の通有性とて、用愼は致しつゝありしも、これで死ぬとは當人初め小生も考へず、一日より四日まで芝居を見物、五日から小生祥瑞起稿のためずつと在宅、そのため九日も自ら髮を結ひ入湯までして、十一時半小生へ羊羹三切持來り一片の半ばを食し、半を小生へくれ、五分ばかり話して入床すると、苦しみかけ用意の藥を與ふると、小生の手を堅く固く握りし樣子の變化に驚き、醫師に電話して二階へ上ると、もう口が利けないで、醫師が十五分ばかりして來た時既に斷末魔、とう〳〵十二時に落命といふ果敢なき分れに候。

△昨十四日やう〳〵初七日をすまして一段落、醫師は妻の藥もなく、主人の藥をしませう、後が大事といふ始末です。

△御心ざし忝く、實はどう私のアト始末をしようかと考へをります。まだ心落ちつかず、兩三日中に小生の考へを纏めてと思ひをります。かうなると大阪で相談する友とても少く、實に心細く、淋しくこの七日間を夢と過し申候。

△今度こそ眞に一つの身の置き處に候。一切の雜事を切つて仕事が出來る方法を企てようと考へつゝあり、兩三日中に存じより申述べたく、御力を御貸し下され度候。

△取あへず御禮此事に御座候。草々

一月十五日

彼は新聞記者生活を續けたに似合はず一面にはきちやうめんであり、豪酒でありながら斷然正體を失はなかつたと同樣に、性問題についても案外正直であつた。嘗ては上方の美男番附の首位に推された彼は、女性を弄ぶよりは寧ろ女性に引摺られる素質であつた。初めの妻も中の妻も苟且の關係から出發して、其臨終まで親切に見送つてやつた。

△私の方針は私の內心に確定致しました。私は私の今後をこれを機會に仕事（陶磁器の研究。人形淨瑠璃史）に直進邁往します。そのため、今の堺の家を、亡妻の五十日忌をすまして閉ぢます。私は家財を片づけて、藏書と身近の衣服を持つてアパート生活に入ります。五十日祭が廿六日（二月）に相當しますので、二月一杯を堺に生活し、三月一日からアパート生活に入る。

△時事の仕事を生活費に當てゝ、その間の時間を仕事に費やし、世間的の煩雜事からのがれようと決心しました。

△その方針でこの五十日間、二月までを準備に過し、三月一日から甦生します決心。

△唯問題は東京と違つて、大阪に心身の落ちつくアパートがあるか否かが問題です。——なければ離座敷生活、下宿生活——然るべき落ちつきもこれよりと努力します。

△處で、茲に新たに私に油然として湧き出た一つの「希望」があるのです。これは私の今考へてゐる「希望」に過ぎないが、實現さるゝをえばこれに越す私の幸福はないと思ふのです。

△それは、大阪では自惚れると劇壇では少しは知られてゐますが、大阪的上方的で、中央では無力な私ですから、今すぐ上京しても何とも足がゝりも手がゝりもない事を惱みます。故に私一人の內心の希望を直言すれば、早稻田大學の文科で科外でも何でもいゝ、然るべき時期から「人形淨瑠璃史」を講義（連續的）したい。黑木勘藏氏といふ篤學者のアトに吾々如きがと思ふが、事情が許すなら致したい、臨時雇講師でも何でもいゝ。

△唯條件は、尙私の地盤は大阪においておきたいから、月のうち前半月を大阪で暮して、時事の劇評と「人形淨瑠璃史」の取調べを大阪でしたい。月の後半を東京で暮

したい。そして講義時間を月の後半に纏めたい。
△そしてこの大阪東京の往復の旅費が出て、上京するための費えが稼がれゝばいゝ。大阪にゐてゝも食ふのだからそれは時事の手當でやれる。
△――といふ風な希望を抱くに至りました、これを足がかりに東京へ進出したい希望。
△勝手すぎるでせうか、こんな事が出來ないでせうか。
△かういふ風な生活を續けて、もう少し引込み思案から躍進したい希望が湧いて來ました。
△右の私の希望を御批判下さい、そして成るものでせうか。どうでせうか。どうせこれは大兄を御相談相手に勝手に極めてゐます。御迷惑でせうが、御批判と御指導と御手引とを願ひたく存じます。草々。

一月十七日

右の手紙で將來の希望と決意を告げながら、共三に於て忘れ難い綿々の情緒と掃ひ切れぬ煩悶を洩らして居る。

（前略）本年はいかにも暖かで、昨年は樂に暮した私は本年もこの暖さで身體はいゝやうです。何となくこの淋しい心持がどうもまだ癒えません。早く心機一轉の引越しを只管待つてゐます。この二月をこのまゝに過して三月から心持を清々と、一切の心持をすてゝ一入の淋しさを鐵筋コンクリートの洋室の内に籠めようと存じます。一層の淋しさは一入の「研究」への道へ出られて、却つて淋しさが癒せられようといふ逆手な淋し味治療を考へてゐます。今のこの堺の家にゐると、女々しいといふよりは生前の事が一々に思ひ浮べられ、又人もさういふ眼で見る事によつて記憶が呼び起さるゝこと一入の無意味な單なる追憶にのみ浸ることになるのを避けようと心得てゐます。只アパートの探索に骨を折つてゐます。草々

二月十四日

其四は新生活への第一歩を豫報したものであるが、「一度に寒く冴え返つた」といふ一句は、偶然にも近く來らんとする不祥事を暗示したものとも思はれる。

（前略）小生いよ〳〵三月五日頃に尼ケ崎市外塚口（阪急線）三樂莊といふアパートメント・ホテルへ引越す事に極めました。アパートメント・ホテルといふと氣が利

いてゐるが、木造洋館の三階建の三階の隅つこへ、淋しく引越します、十疊の洋室に收まります。早く堺の現地を去りたい一杯の心と、極るとさすがに味氣ない心持が頭を擡げます。人といふものは弱いものです。昨夜來一度に寒く冴え返へりました。珍しく晩まきの初雪がチラ〳〵、こゝがからだの第一番の怖い時節です。引込んでゐます。どうぞ御自愛專一に祈ります。

二月十九日夜

其五は果して失業苦を報じて來た。不活の痼疾、死別哀愁、その上に又この災難、今こそ彼が最大窮地に陷つた時であつたが、よくも自暴自棄に墮せず、豫定の方針通り姪の初子さんに何くれと助けられて、アパートへ引越した。拜啓。先刻手紙さし上候、その後時事社から電話あり、出社すると、社編輯局長の一身上に大變動出來とかで又々局内の大動亂、そのソバ杖（？）で小生も御拂ひ筥、この編輯局長の手で劇評をたのまれ、囑托といふ小生の身上に候。つく〴〵ともう月給とりがイヤに相成候。明日引越しといふやゝコシい折も折とて、本年に入りて二度目の途方にくれつゝあり、御憫笑〳〵。つきては大決心を要し申候事、引越しつく〴〵と思案したく考へつゝあれど、無理な御願ひなれど先般の早大の儀、尤も御盡力下されつゝある事と千萬察し候が、この時この場合につき御賢案、最善の方法御講じ下さるやう切に願上候。一身上の不安が二つつゞき、この處一寸氣を腐らしつゝあり御賢察下され度候。御願まで。

三月四日午前一時半

其六の前半を讀んだ時は、ひどく彼の健康を氣づかつたが、後半に及んで、彼の反撥力に心强さを感じた。後に單行本となつた「祥瑞の研究」は彼が鬱憤の大爆彈であつたのだ。

（前略）一昨日御手紙を見てすぐ返事を出しました——御禮をかねて「むくろ大神」の事を申上げたのですが、ソノ手紙着しましたらうか。實は塚口のポストが遲れるので、大阪へ出がけに投函するハズでポケツトへ入れて出ました。歸宿してソノ手紙を出しか否かのハツキリした覺えがない——ボンヤリしてゐます。すると大兄への

手紙と共に出した筈の急用のハガキ二枚が、不着らしい事が今判つたのです。すると大兄への手紙も投函しなかつたか否か。全く私の過去に嘗てないボンヤリした心持――今これではならぬ、かう氣が弱り、凡てに闘志を失つてはもうダメだ。取戻しがならぬ、今日まで隨分數奇な運命に直面しても平氣に邁往したのに、この一月以來の心の弱さをまざ〳〵と今味つて反省してゐます、奮起しようと目を瞠つてゐます――こんなことではならぬと自ら鞭つてゐるのです。手紙の投函したか否かの一些事ですが、この蝕ばまうとしてゐる心の弱さを今叱つてゐます。さしづめ、今急ぐ「祥瑞研究」の第三に執筆するのですが、喧嘩腰の心をまづこゝに用ひようと決心してゐますところです――御笑ひ下さい。「祥瑞」の第三以下或は穩健よりも闘志滿々でやらう、有田町の李參平の陶祖神を打倒さうといふのが、今の奮起の目安にしてやらうと思つてゐます――李參平こそいゝ面の皮――笑つて下さい。

三月廿三日

かくて夏も過ぎ秋の末になつて故郷上方を振棄て、早大講師として東京へ上つたのである。彼の悦びは言ふ迄もない。初めの擔任は近松と西鶴の二科目、やがて三科目となり、四科目となり、德川文學に於て學生の景慕の的となつた。たゞ、彼が心血を濺ぎ、學位論文として世に問はんとした『日本あやつり史』の草案が、彼の腹の底に祕められたまゝ葬られ、彼が最も得意の『西鶴辭典』が未完成に了つた事は、返す〳〵も遺憾の極みである。

筐の手紙

高安吸江

石割君と私との交が何頃からであつたかハツキリ記憶しませんが、何でも大正の始め、君が大阪で記者生活をし出

した頃ですから、ザツト廿年餘になります。その間に君が專門の演藝方面と痼疾の高血壓性慢性腎臟炎に關して多く交渉をもちましたが、さてとなるとに是といふ話願を見出しかねます。

それで此程から探し出した君の手紙、それも古い處は無くしてヤツト昭和時代のものだけ約廿通餘もありましたから、それについて少々お話して見ませう。

一番古いのが二年十一月廿四日附で、それは代筆です。十日許以前に急死した中村雀右衛門のために非常なショツクを受けた君は、輕症ながら同病を患へたが幸に間もなく恢復したその報告です。爾來君は所謂「節制ある氣儘」で押通して終に今年まで餘命を保つことが出來たわけです。

その他の手紙は無論いろ〳〵の場合に寄せられたもので島の內會、夕刊大阪の福良竹亭翁等と共に企てられた昔の大阪を語る會です、それから芝居の合評會行事もあれば地唄の會、井上流舞踊の件等々と一々述べ立てれば限がありませんが、(一)故中村雀右衛門遺族に關する件(二)蕪村の劇評消息に關するもの(三)許多脚色帖に關するもの、と此三種が主になつてゐます。

此等は何れも徹底的に終極まで行かねば止まぬといふ君の特性そのまゝに、委曲を盡して折返〳〵書かれてゐます。例へば蕪村の手紙、此れは安永八年正月廿五日京南側芝居の二の替の劇評ですが、其出演俳優に關して私から問合せたのに對し、五通も長文の返事が來ました。其時の狂言が國書刊行會本の文七一代狂言記に「ながいや山左衛門」(實はなごや)となつてゐる事から「もう〳〵めつたに活字本は引用出來ません」と誤植の多い點について細々と述べた上、次の句がありました。

國書刊行會の初めは私も學校を出るとすぐ勤めて、月給を貰ひ初めの處ですが「新群書類從」は私ではありませんが、內で某全集が私の校訂校正です、今見ると汗三斛に値します。

此頃は例の演藝月刊で「正直にものを云ふ」を標語とし獅子奮迅の勢で八方へ當り散らした時ですから、其爲に病勢が惡化しないかと、私等は大にビク附いてゐましたが本人は案外平氣で

今年はふしぎに小生暑さをさほどに思はず病人離れした心持致し（中略）これも身を思ふまゝ氣儘にしてゐる故かと存じ候……山本儀右衞門……「鬼瓦」と綽名さるゝほどでみると容貌からしての先天的に敵役になつてゐたやうですし私のやうな奴でせうか

とこんな洒落も出でそれから終る。

眞サラな「もゝはがき」をえました、專門外ですが餘りにいゝ本に惚れて貧乏の上ぬりをしてゐます。

大阪には古くから濱眞砂、水落露石、打越晴亭、永田有翠などいふ好事家があつて、古書畫や古本などの會がよく催され、并會などもその一ツでしたが、石割君は趣味家といふより寧研究家の方ですから、あまりそうした純趣味の會へは出席しなかつたやうに思ふが、其君がこんな氣持になつたといふのは、當時よほど心に餘裕が出來たと考へねばなりません。

更にまた君が研究心、いつも〳〵進んで停止する處のない智識慾については、昭和五年八月七日附で手猿樂に關する問合せの書面によく現はれてゐます。

ボツ〳〵足利に遡る覺悟に候が、高が長慶（？）までゞ滿足し主として寛永以降しか知らざりし過去が五十年目に恨めしく、これでは死ぬまで目がたらぬやうな焦慮を感じ申候云々

まだ〳〵書けばいくらでもありますが、あまり煩はしいから此位にして、最後に七年二月東京から出たハガキを抄錄します。

……初めて教壇といふものに立つて生徒よりは自分の勉强になります。自分の述べてゐる事に不足、矛盾が新たに發見される、これは御喋りの德と學生の若い感受性からの反映の二原因だと初めてハツキリと經驗しました。來年の四月新學期から三年の壽命があらば私の最後の仕事は完成すると自信が出來た事を幸福に思つてます云々

三年の壽命、成程時間的には丁度滿三年經ちましたが、世の中の事はそう思ふやうにはならぬものです。果して君の仕事が此に書かれた豫定通り運べたやら、甚覺束ないことゝ私は信じます。しかし又何處かに藏ひ込まれた君の遺著が、何時かヒョツコリ現はれて斯界を吃驚させることが

あるやうな氣もして、私は其實現を心から祈つてをります。

凡てに意外なりし石割君

五十嵐力

石割君について書くべき事は實は何もない。唯だ編輯子からしば〳〵強ひられて據ろなく書くのである。

私が石割君に交際を願つたのは、君が文學部來任の時を以て始めとする。その時から、私は君について聞いてゐたわづかばかりの噂やまた書かれたものを通ほして得た感じなどから、ひそかに君の烈しい鋭角性を想像してゐた、ところが實際交はつて見ると、月毎に年毎に、その溫情を感ずるばかり、溫情に痛はられつゝ、君の深き蘊蓄の御裾分けを受けるばかりなので、私は常に之れを難有い意外だと思つてゐた。

私はまた君の同じ鋭角性が學生達と調和しにくい要素を含んではゐないかと、心私かに危ぶんでゐた。ところが此の危惧もすつかり杞憂に終はつて、君と學生達との間の親しさが、月に年に進展して、しかもその親しさが遂に兄の如く、友の如く、父の如き傾きを見せるまでになつた。私は常に之れをうれしい意外だと思つてゐた。

私はまた君と健康上の事などを語つた時に、君はよく、足許に死を控へてゐるやうな事を云はれたものである。そして君は自分の言葉を裏切りつゝ、常にピン〳〵して人幾倍の仕事をして居られたので、今度の大患もその例のに一寸念の入つたものであらうと信じてゐた。それがあの通り急轉直下して間もなく幽明を隔てらるゝこととなつた。これは私に取つて實に悲しい最後の意外であつた。

私は君の「深き實」について語る資格がない。止むを得ず君から得た主觀の感じを語つて、君の一笑を博したいと思ふのである。

石割松太郎君を憶ふ

吉江喬松

學生時代、机を並べてゐた石割君と、先日逝去せられた石割君とを比較して思ひ浮べて見ても、私には少しも異つた印象が浮んで來ない。それはどうしたわけだらうかと考へて見る。

私にとつては石割君は學生時代から、最近見たやうな一種僧形のやうな風貌の人であつたやうな氣がされてならない。さうした印象をお通夜の晩に語り出すと、總ての人がそれに反對して、黑髪を長く房々としてゐた石割君の相を眼に浮ぶやうに、描いて見せる人もあつた。しかし私には一向さうした思ひ出は浮んで來ない。

いつも大方無口で、蒼白な整つた顏立ちをして、書物を前に、考へ込んでゐるやうな相貌しか私には思ひ出せない。あの顏立ちに房々した黑髪などがあつたらば、寧ろ不自然なやうな氣さへするのである。

おそらく石割君は、學生時代から、自分の一生を打込んでやるべき仕事のことが、いつもおぼろげではあらうが、胸裡に湧き上り、盛り上つてゐたのでないかと思はれる。それを喋り散らしたり、書き散らしたりはしないで、大事にして自分の一身にたゝみ込んでゐたのではないかと思はれる。

我々同期の人々といつては實に種々雜多な人の集りで、いまだ成熟した文學的空氣なぞは到底味はうべくもなかつた。その中に、凝然として机に向つてゐた石割君の姿のみは明かに目に殘つてゐる。

晩年になつては特に愛嬌のある好い眼をしてゐたが、それが青年的には別に愛嬌はないが、澄んだ、高い眼であつた明眸と言ふべきであらう。それとあの端麗に近い顏立ちと蒼白な色とは、雜學者流の中で、一種の光りを放つてゐた。

石割君の深く藏してゐた熱意と、何事かに打當ると敢然

とした立つたあの意氣と見識とは、世の雜輩には一種の恐怖でさへあつたであらう。あの人には、よく談笑茶飯の間に見掛ける馱じやれや、幇間的迎合の惡趣味なぞに到つては些の影さへもなかつた。その點で私は石割君の學徒としての高潔さを深く敬愛してゐた。

卒業後、約三十年間に大坂で一回、東京で一回逢つたきりであつたが、四五年前、山口剛君の擔當して得られた講義の後を引受ける事になつた時、坪内先生のお手許から、石割君のなすべき講義の二三科目のスイノプスイスを彼自身書いて、先生へ提出したものを、廻して寄越されたのを一讀したとき、彼は果して凡庸ではなかつた、よくこれまで精細に同時に野心的に研鑽を積んだものだと、驚嘆せずにはゐられなかつた。

全く惜しい人を失つたものだ。先日の告別式に學生諸君が吊辭を述べてゐるのを聽いてゐると、私もまつたく涙の流がれるのを押えることが出來なかつた。

過去六年の間に、我々の文學部は八人の教授講師を失つてゐるのであるが、いづれも掛けがへのない方々である。それを思へば實際痛惜に耐へられぬ。

けれど、石割君が學生諸君に言つたといふ「皆な力を協せてしつかりやれ」といふ奬勵の言葉は、我々にも殘された遺言のやうな氣がされる。熱意と明敏とは我々の學園が必然的に生み出す傳統である。彼が持つてゐた如き熱意、彼が示した如き學的聰明さ、それは今後とも無限に生きて行くものである。石割君の如きは實際我學園の生み出した最も好き典型人物の一人であつた。

石割松太郎君

窪田空穗

石割松太郎君の顏を知つてから二十何年といふ久しい年月が立つてゐるが、私は一度も石割君に手紙を出したこと

もなく、又石割君からも貰つたことがない。石割君と私の交際はさうしたものであつた。しかし時あつて石割君の噂を聞くと、私は二十年を見ないその風貌が、すぐに、あり〳〵と浮かんで來て、自然の折をもつて逢ふことが出來たらうれしいだらうといふ氣がしてゐた。

初めて石割君を知つたのは、早稻田の學生としてゞあつた。同じ時代ではあつたが、私は專門部の學生、石割君は新たに出來た大學部の學生としてゞあつた。部までちがつてゐたが、何ういふ經路によつてゞあつたか私は石割松太郎君を知り、石割君も私といふ者を知つて、逢ふと笑顏を向け合つて、種の無い、すでに忘れてしまふ話をし合つてそれで双方嬉しさうにし合つたのであつた。

その當時の石割君は、どちらかといふと痩せた、濃い髮の毛を百日かづらめいた恰好にし、やゝ蒼い顏をした青年であつた。一見、感じの纏まつて來る人で、藏する所のある、きかない氣の、秀才型の人に見えたのである。

二十年間、噂によつて浮んで來る石割松太郎君の顏はさうした顏であた。

再び石割君の顏を見た時は、早稻田大學の講師として聘されて來た時であつた。

私はその容貌の變つてゐたのに驚いて、やゝ戸惑ひに近い感がした。からだは太り、顏は赦くなり、そして頭には一本の毛も無くなつてゐたからである。しかし少し見てゐると、その眼つきから、口もとから、當年の面影が現はれて來て、まさに石割松太郎だといふ氣がしたのである。

古馴染といふものは尊いもので、私は重ねて石割君に逢ふと同時に、學生時代に受けてゐた印象を、そつくらその儘に石割君に被せてしまつて、無條件な信じ方と親しみ方とをもつてした。しかし年しての再會といふものは恐しいところがある。私は石割君の私生活については、殆ど何も聞かうとはしなかつた。興味が無いのではない、年齡と共に持たされた遠慮が、さうした立ち入り方を許さなかつたのである。そして、いつか自然の折に分る時があらうとばかり思つてゐた。私生活に立ち入らない附合は、いかに親しい心は持つてゐても、結局平行線である。この平行線が五年間を續いて、それが角度を持つて一つにならうとした

のは、石割の病床に侍して、殊勝な看護をしてゐた學生に促され導かれて、病ひを見舞ふ者となつた時からである。そしてこれは石割松太郎君の終りの日の近い時だつたのである。

さすがに永い同僚關係であつたので、私は折々に、石割君の自然に見せる人柄に觸れ得ることがあつた。それはすべて、正直な、素直なそして素裸になつてゐる石割で、たゞの一度も、變に感じるやうなものはなかつた。今に何か素晴らしい事をするといふ期待と共に、この純粹な石割君は、私の胸にはいつも近くゐたのであつた。

勿體ない人が死んでしまつたといふ心と、親しい人に死に別れたさみしさとが、時折に私を襲ひつゝゐる。さういふ時には必ず、慶應病院の床上に見たいたましい姿が眼に見えて來て、心に重い喘ぎを覺える。

前掛姿の石割さん

河竹繁俊

石割さんのことは、初め僕らはやはり劇評家として知つた。演藝畫報や新演藝へ大阪の劇評を書いたのを讀んでからだつた。學校時代は出ると入るとの違ひの先輩だつたし、都新聞の記者の頃もすこしも知らなかつた。

昭和二年の六月に、坪内先生を記念して演劇博物館の設立が計畫された。僕は建物のできるまでといふお約束で、その仕事を手傳つた。實は、たゞ事務所で手紙の宛名でも書いてをればいゝと思つたのが、寄附金の募集もしなければならなかつた。――そんなわけで、大阪へも三度ほど出かけた。その第一回目の昭和二年の十月に行つた時、石割さんに親しくお目にかゝつた。長谷川誠也さんと片山利久さんのお伴をして、大阪毎日新聞社の應接間で。それが初對面だつた。

書いたものを讀んでゐたせゐか、少しも初對面らしくな

かつた。調子よく、いろ〳〵話しを聞いて下さり、御盡力の甲斐あつて、大阪の松竹の寄附金も、結局東京の松竹や帝劇と同樣に取りきまり、大毎社の寄附額も決定した。

その御厚配を頼はして間もない數日後、僕は豊岡佐一郎氏に案内されて、堺の車の丁の石割さんの居をおとづれて石割さんとしては不相應な多額の御寄附金の豫約を無理から願つた。あとから考へると、隨分無鐵砲なことを願ひ出たものだと思つた。其時だつた長火鉢を控へて、羽織も着ない、前掛姿の石割さんにお目にかゝつたのは。さうして、不思議と其の姿が眼に殘つてゐる。石割さんを想ふと、あの姿がいつも浮んで來る。或ひはこれは、自分も寒さに向ふと絹綿のぶくぶくはひつた半纏にくるまつて、前掛をやつてゐる。そんなところから、あの堺での前掛姿が眼にやきついてゐるのかも知れない。

それがお目にかゝる御緣かして、演劇博物館のことでは、何くれとなく、おしまひまでお世話をかけた。

曾我迺家五郎に演博のために寄附興行をさして上げようといふことは、實に五年前、早稻田の先生になられてからの懸案だつた。五郎氏が堺の小學校で同窓生であるからでもあつたが、石割さんの力を以てしても、容易に實現を見なかつた。何にしても五郎氏のカラダといふものが忙しいので、石割さんは氣にしてゐた。

それならば五郎氏には、フオールスタツフがよからうといふので『ウヰンザアの陽氣な女房』を、坪内先生が兩三年前推選して下さつたので、石割きんの手から送つて貰つた。間もなく基本はできたといふ話しだつたが、扨それを演博のためになるやうに、上演してくれる時といふものが又得られなかつた。

ことしの三月、石割さんが大阪へ歸り、病臥してゐて歸京された。さうして滯阪中に五郎氏と打合せて、今度こそ最も可能性ある方法がついたといふので、一度お逢ひして、いよ〳〵五月の中旬演藝場での興行中特にマチネーを二日間だけ演博のためにして上げようといふことになつた。——これは全く石割さんの顏を立てゝ下さつた五郎氏の容易ならぬ御厚志だつた。

その話しを、僕と一緒に確定するために、五郎氏を新橋

演舞場の樂屋に訪問した。――今日行かうといふ電話があつたので、迎へながら文學部の教員室へ行つて見ると、カラダの具合がよくない。印象が甚だよくない「今日は止めにしたらどうです。」「――いや、氣になつてどもならんから――なに大丈夫だ」といふ。石割さんはまるで杖に曳かれるやうにしてゐる。自動車をおりても息をきらしてゐる。僕は始終ハラ〳〵してゐた。一刻も早く車で送つて休ませなければならないと思つた。

その話はすべて順調に運んだ。が準備期間の短かゝつたことや、二日間三千人の觀客を入れる自信のつけられなかつたゝめとで、殘念千萬ながら中止になつた。これは一つには石割さんの顏をつぶし、また一つには五郎氏の折角の厚志にそむく結果とはなつたが、事情は如何とも止むを得なかつた。石割さんは、これを心殘りにされたことだつたらうと思ふ。併し御芳志は立派に屆いたのだつた。長い懸案を立派に果してくれたのだつた。それを一歩手前で實現させなかつた責は偏へに僕等にあつた。この點は淨音院文譽松操居士に衷心お詫を申します。

五郎氏は今月演舞場の興行に、その作『袞の鼠』を第五の切りに上場してゐる。さうして「此一篇を鄕友石割松太郎氏の尊靈に捧ぐ。沙翁の名著「陽氣な女房」の一節よりヒントを得て、揑ち上げ、演劇博物館の爲に上演してと……同氏と語り合ひしも今は空しく夢となりました」と添へ書きをしてゐる。適當の機會に同志を募り、追悼の心を籠めて見物したいと考へつつ、私にも心殘りの此の話を、雨の日に書く。（九月二日）

五段配當律と荷帳

三田村鳶魚

操について石割君から色々教へて貰ひました、それは在大阪の頃でしたから、往復の手紙が澤山ございます、却て

上京後は閑談の機會が尠い、問答商量の暇もなかつた。しかし偶人劇史が出來さへすれば、私の聞かうとしたこと、教へて貰いたいと存じことは詳悉すると存じて、度々逢ひながら忙しさうであるから、時間の潰れるのを遠慮して、只た著書の出刊を待つてゐたのに、今日は其望みも絶へてしまいました。往復した手紙を出して見て、殊に殘念に存じますことが二つあります。

△九段十段十二段は五段を破つた新形式と認めてよろしからんと存じ候。

△太夫は五段形式を決して固守してゐません、「顔」に關してとのみ解釋してよいと存します。忠臣藏九段目は四段目としてゐます。四段目の格式で語る、太夫の位取りだけでなく、語り場の位取りとして四段目としてゐます——強いていへば語り場の語り口の目安を五段に立てゝゐるのが、尤も安易な點もあると見ませうか、故に太夫は五段といふ形式は固守しません。

△段數の多い新型式は、私は作者の腹といふよりは太夫元の注文だと見てゐます。場面轉換の益々多きを望んで段數冊子の多きを作者に太夫が注文したものだらうと存じます、

△三代長門は天保度の人です故にこの人が立端場をいひ出したのでなく、三代長門が語り口の格式を喧ましくいつた人、淨るりの上のいろ〳〵な格式や規則を作つてゐますから、太夫が五段に分ける五段の「黄金律」を確立した人と思ひます。何故なれば彼は三段目四段目語りか、いなりの芝居にゐるといふ理由で、自分が二段目から脱出して、三段目語りの格式、資格の出來た時にいなりの芝居を退坐して、道頓堀に旗上げをしてゐます。長門の意は三、四段目語りは一座に一人でいゝといふ見識と見ます。故に長門は一日一狂言がその主張で、「付物」を變態としてゐるやうです、

△御質問に刺戟されて五段に切る鐵則を少し實例によりて、いろ〳〵異つた例を擧げてみようと試みてゐます。太夫の校閲を經て御目にかけませう（右にいふ「三浦の別れ」など、素人では困る一異例なのです）これは「三浦の別」を太夫の方で彈いて四段目にかたる必要上、道

行を挿挾へて、院本の七冊目を無理に八冊目にしたのかも知れず、それならばこれはいつ頃からであるかを十分に調査したいと思つて取かゝつてゐます。

△五段の事なか〳〵ハカ行かず候、これもう少し御猶免願度、大事の事ゆえ、太夫によく賴みあれど、太夫はそれ程には考へをらず候なので閉口に候、

端場立端場の質問から、爰に及んだのでしたが、私に教へる積りで丹靑はしてくれたのに、此太夫とあるのは誰のことでせうか、誠に殘り多うございます。

淨るりの冊數になりました理由の中から、荷帳のしらべの必要を心付きましたので、援助を求めました。

△「藝術殿」で貴稿「荷帳」拜見、文樂座で小生も座の人も呑込めなかつた點が實物で明瞭に相成候、が文樂座だと少し樣子が違ひ申候やう也、今の文樂では頭、手、衣裳の外は全く先方で間に合はせつゝあり、結局豫定の出し物如何による事と相成候、されば昨日「藝術殿」を見て小生の感し候事と、文樂座の「荷帳」を製する事は容易な事でなく、且つ效果は——それよりは丁年年始に際しをり候間、玆向ふ一年間を限り毎興行に用ひる頭、手足を取調へては如何、大道具小道具は不用に存し候（道具帳が故）右の主として「頭」の一ケ年の記帳が一等有要に、且つその總計が「カシラ」の轉用流用を明確に知りうるかと存し候、卽ち試みに一月興行の毎場割の人形に記入致さすへく、一ケ年計畫に致したく候、

是は勿論お願ひしました、其の上に懇請いたしたので、

△大道具は御說ですが、「寫眞」と「大道具帳」以外に、どうも道がないと思ふ、寸法は數種の常用のワクで決定してゐる、背景は今は芝居の（道頓堀の種田といふか）やつてゐるから芝居と變りがない、「人形としての特色」を「入念」に取調べる對象が、今の處は「寫眞」と「道具帳」以外にないと存じますが、どういふ處を入念に取調べるか御示指を願ひたく存します。

△小道具の形の替つたのは、いい機會に一揃へ撮影しようと存します、「阿古屋」の岩永の使ふ火鉢、狐、ドモ又の手水鉢の類、

△文樂座の道具の義御高示了解致候、十分御主旨に添ふ

べく心掛申度候、丁度歳首なるが心持よく、正月興行から取かゝるへく候、一年終りに相當の効果を擧げたく努力致すへく候、

此等の往復は昭和六年から七年の春にかけてのことで、其後は兼々の著書の出刊を待つておりましたが、御殿の文句のやうに千年萬年待つたといふ悲しい思出だけになりました。

我が幼友達そして教導者

曾我廼家五郎

石割先生は私と同じ泉劦堺市の産で小學校も同じ幼友達だつた。私は幼にして故郷を放れ喜劇曾我廼家を樹立する迄永い流轉の生活を續けましたが、その後はからずも同じ劇道に先生を教導者として見出し得た事は誠に奇しき因緣だつたと思ひます。

先生は劇評家として稀に見る辛棘な筆を構へられ大義親を滅すると云つた烈しい情熱の人で私如きも時々その叱責に觸れた事もありますし、殆んど何人も賞讃以外の筆を取り得なかつた、成駒屋さんを攻擊された一例でも劇評家としての使命の前には絶對に曲筆しない志士的氣慨に滿ち滿ちた性質だつた事が判ります。それ故あの執拗に暗く澄んで澄み切れない大阪の空氣が先生をして遂に大阪を去らしめた原因となつた。だが東京にうつり住んだ先生も良藥は口に苦く眞實を忌む曲められた時代に生れて來た限り私達が同情する程常に大きな苦痛を味はれてゐたが終始一貫よき批評家としての節を持せられた事は、現代珍らしき氣骨の人と云はねばなりません。

我が演劇批評界からかくも急激に先生を失つて寧ろ呆然たる有樣ですが、劇界の損失は我人共に同じですが、私個人としては幼友達を失つた悲しみ、淋しさはつきるもので

なく、その上曾我廼家喜劇の爲にはよき理解者としての敎導者を失つた痛手は何よりも甚大なものです。

先生は曾つて曾我廼家の傳記を書いて下さる事を約された。それは曾我廼家が日本最初の喜劇として何人かの手によつて殘さる可きものであが、五郎自分の自傳ではよく書けばキザに取られ惡く書くのも愚な話それ故先生が第三者として正當な傳記を書いてやると有難き忖度の情を示されたのでした。二〇加の名人を輩出した鄉土堺時代から始め曾我廼家の現在から未來へ――それが完成を見ずしてこの唯一の依賴者を失ひましたが、その一部は先年「中央公論」誌上に「曾我廼家五郎論」として發表されて居り今までの多くの私の傳記は或は誤傳され或は惡傳されて居りますが主に義兄十郎と私の關係に就いては先生が眞甲から正しく批判された點で私の終身忘る可からざる知己であり善知識であつたと感銘して居ます。

先生に赴かれて私の心苦しい一つは曾我廼家の新しい試みとしてセクスピアの「陽氣な女房」を上演する樣奬められ乍ら延引して漸く今秋その約を果す運びに漕ぎつけ先生の急赴によつてその喜びを得られなかつた事です。

いづれ空しくなつた駄作「陽氣な女房」の臺本を先生の靈前に捧げて日本劇界に曾我廼家を喜劇として今日の地位まで高め導いて下さつた先生の廣大な恩誼を一座を以つて感謝し、なつかしき幼友達の冥福を祈り度いと心願してゐます。

合　掌

石割先生の追憶

豊竹古靱太夫

私が石割先生を知つたのは、今を距る十四五年以前先生が在阪新聞社に御勤めの頃からで御座います。先生は義太夫淨瑠璃の研究家として、斯道の史實家であり文學家でありましたが、私共斯道に從事してゐる者から窺ひますと、

淨瑠璃の聞天狗として一見識を備へた大家たるの半面に對して、最も敬意を拂うて居つたので御座います。私が先生を敬慕する點は何時も堂々たる筆陣を張つて、褒める時もくさす時も同樣に自分の姓名を明記し、不服があれば何時でも來いといふ男らしいやり方にありました。私も最初から何時も叱られくさゝれて居りました。理屈に趨り過ぎるとか、潤ひがないとか、人形の腹を間違へて居るとか、殆んど十中八九迄思召に叶はなかつた樣でありました。然し私は公正な批評と堂々たる筆陣に對し、何時でも心持よく拜見して反省しつ修行の羅計と致して居りました。後年親しくお目に掛り、其御高說を承る樣になりまして、益々深い御造詣に感服し、全く胸襟を開いてお話合ひも致し御指導を受けた事も尠く御座いません。

本年三月下旬御下阪の砌、茅屋を御訪ね下さいまして數時間歡談を致しましたのが全く永刼のお別れで、其節私が血壓が高くなり就床致しました所大變御心配下され、御自身受診中の博士の注射が中々よく效くからと名刺に御紹介下いましたが、其石割先生が先に逝かれました事を想ひ出しますと、今更に世の無常を染々と味はされます。

先生御生前の御話によれば慶應三年迄の分は義太夫誌が高野黑木兩先生の邦樂年表義太夫之部で既に公にされて居るが、其以後卽ち明治以降の分が出來て居ないから、それを執筆して世に公にする考へで研究に精進して居るとの事でありましたが、承る處に依ると既に完成して居るとの事であります。私共斯道に流れを汲むものは素より、我國粹藝術に趣味を持つ人々の爲にも大なる貢献であると信じます。

反へす〳〵も、淨曲界に活眼活耳を有する人の僅少になつた今日、先生の如き唯一の識者を亡うた事は斯道の爲め殘念千萬の事と存じます。

先生の御冥福を祈り聊か此處に所感を述べ擱筆致します。

（大阪南海住吉畔妙聲庵にて）

石割先生のこと

吉田榮三

先日先生の訃を伺ひまして、何事に就きましても飾り氣なしに云つて下さる唯一のお方を失つて終ひました事を知り、全くびつくり致しました。

今から九年程も前の事になりますか、丁度御靈の文樂座が燒けまして、道頓堀の辨天座へ出ました。(たしか昭和二年の六月頃)その中狂言に「一の谷」が『陣門』から『陣屋』まで出ました。これ迄は故國藏さんや故文三さん、それに駒十郎の辰五郎さん等が居られまして、熊谷を遣うて居られましたが、其頃この四人さんがパタ〳〵と亡つて終はれましたので、如何仕樣もなく、私が初役で熊谷を遣はさせて頂く事になりました。

御承知の通り、熊谷は『組打』では、鎧を著けて居りますので、たいへん人形が重たく、その上小一時間も保たねばなりませんので、非常にえらいのです。その上『三段目』では芝居が大變難しくなつて參ります。私も初役の事とて色々一生懸命に遣ひ、殊に「心にかゝるは母人の御事……」の件で、從來は藤の方に目を引きましたのを、相模の方に目を引く樣に型を改めて演じました處、先生の御心に叶ひましてか、早速「サンデー毎日」に詳しく御批評下さいました。色々と苦心致しまして、熊谷の情と物語の內容に相應した解釋で、從來の型を改めて見ましたのを、よく見て下さいましたのですから、こん嬉しい事は御座いませんでした。此外「勸進帳」の辨慶、「狐場」の忠信等も御批評頂きましたが、何しろ先生の御批評は、御覽になつた儘を無遠慮に云うて下さいますので、我々に大變爲になります。こんなお方さんを失ひました事は誠に殘念な事で御座います。

私は兼々「薄雪」の兵衞を一度遣うて見度いと思うて居

りますが、あれは亦大變な難しい事ですが、一つ凝りまして、其節は先生に御遠慮なく云うていたゞこうと、實は内々樂しんで居りましたのですが、それも出來なくなり失望致して居ります。

先生のおなくなりになつたと云ふ事は人形界に取りましては大損失で御座います。（談話筆記）

石割先生を憶ふ

山田二郎

先生の御靈を御送りして茲に幾旬日、忘れねばこそといふ言葉は、その後の私達の生活を形容してゐるやうなものだつた。寄ると集まると先生の話ばかりだ。或る時には心から嘆き合ひ、又或る時には先生を論じ合つた。どちらにしてもそれは結局先生を悲しむことに外ならなかつたが。今は恩師を失つた悲しみだけでなく、替へ難い人を吾々の世界から失つたといふ、もつと深い悲しみが、私達の心に消え難い傷をつけてしまつた。

先生の姿は色んな場合に浮び上がつてくる。ぢつと考へこむ夜には先生の言葉の端々が一つ〳〵生き返つて來て、私を叱り勵ましてくれる。不勉强を反省するときには、きまつて先生の顏が浮んでくる。

先生が私達に殘して下さつた教訓の最も大きいもの丶一つは、學問に於ける偶像破壞だつた。先人の作つた結論にその儘據ることが如何に危險であるかを、いつも實證的に示して下さつた。疑はしい資料の上に立つ定說は、積木の家のやうに手輕に破壞されるのが常だつた。併しそれが破壞のための破壞ではなく、新らしい發展を目指してゐたものであつたゞけに、私達は痛快を覺えながら、その態度の嚴しさと正しさに心から尊敬を捧げずには居られなかつた。

或る時はこんな言葉も伺つた。學問研究の話の次手だつ

たが、「態度はアカデミツクに、方法はジヤーナリイステツクに」。私にお教へ下さるために、ふと心に浮んだ儘を仰つたのかも知れず、とりあげて先生を偲ぶために使ふのは冒瀆かも知れないが、或ひは先生御自身の學問に對する態度ではなかつたらうか。

大阪時代の先生は、畢生の仕事である淨瑠璃史を完成するために、坊主になることを眞劍に考へられたことがあつたと聞いた。一見ジヤーナリイステイツクな外貌の内にひそむ本然の姿は、それとは全く對蹠的な學問至上であつたを知つた。私達によく「親孝行するのも道樂、勉强するのも道樂だよ」と冗談めかし〳〵仰つた言葉の奥に、こうした嚴肅な心構へが祕められてゐたことを思ふと、今更のやうに身の引きしまるのを感ずる。

○

先生には最初に教つた級の一人であつたために、最も長い年月を、先生の傍にあつて指導を受ける幸福を持ちながら、それに酬ひることを知らないで過してしまつた。先生は何かにつけて、私達を引立て勉强への刺戟を與へようとして下さつた。こんな思ひ出もある、いつの頃か、慶應の演劇研究會に招かれなすつた先生のお伴をして聽講の席に連つたことがある。講義の中に「顏見世」の事が來ると私の方を向きながら「この人は顏見世を卒業論文に書いて、專門家だから」と態々紹介の勞を取つて下さつて、すつかり照れてしまつたこともあつた。

今年の新學期早々のこと、江戸文學班の研究會で役者評判記研究の必要を繰返し說かれた先生は、「山田君も大分前から研究することになつてゐながら仲々實行に移さない、まあ色々事情はある事だらうが……」と、これは明かに頂門の一針、私はたゞ恐れ入つて引下がつたのだつた。それが私の聞いた最後の講義だつた。

間もなく病まれ入院なさつてからの或る日、小康を得て居られた先生はやがて書くべき淨瑠璃史の抱負など元氣にお話しになつてゐるとき、たま〳〵劇評史に話が觸れると、「君もうんと頑張つて早く完成するんだね」と仰つた。最早その時病狀は再起難しを傳へられてゐたときなので、私は默つて頭を下げるより外なかつた。

何時も忘れず私達のことを考へてゐて下さる先生の御厚情に對して遂に酬ひ得ず、不肖の弟子の儘先生とお別れしなければならなかつたことを、この上もなく情なく思ひつゞけてゐる。今はこれを鞭に、頑張るぞと心に誓ふことしか知らない。

追慕の道を行く

猪飼叔藏

私が文學部に入つたのは昭和九年の春であつた。だから先生に親しく接したのは二年三ケ月の短い年月に過ぎないのに、もつと〳〵永い年月であつたやうな氣がしてならない。それほど先生は私にとつて力と頼む大きな存在であつた。今その間のことが眼前に叢つて、何から書いたらいゝのか絲口を發見するのに苦しむのである。

教壇に立たれた先生は實に御熱心であつた。眼が御不自由だつたので、あの誰にも親しみ深い大きな天眼鏡を透かして、細かに書かれたノートや參考資料を見ながら、血を吐くやうな眞摯な講義を續けられた。先生は準備なしで教壇に立つことを最も不快とされた。從つて講義は先生のあらゆる研究の綜合になつた精髄であつた。又「毎年同じノートで同じ講義を繰返すのでは、講義をする方もいやだし、聽く方も面白くあるまい」と言つてゐられた先生は毎年講義の案を變へて行くのに苦心されてゐた。だから學生は先生の講義を幾回聽いても面白かつた。先生のこの御熱心な態度が學生に反映しない筈がない。教壇に立たれて、先生の心臓から迸しる血は直ちに學生の若い脈を高鳴らせた。學に對する先生の御精神には若い學生がその一言によつて奮立つ程の力强さが籠つてゐた。

これに反して、先生の御身體は決して御丈夫とは言へな

かつた。宿痾の腎臓病に惱まれてゐた先生が健康に注意された事は一方でなかつた。健康の爲とあれば、可と信ずる養生を忍耐して守られた。かく健康に留意された先生ではあつたが、ことひとたび學問のことゝなると、かなり無理をなさつてゐるのが、側近の私には眼に見えてゐた。私達が血壓の高いことを御心配申上げても「大分下つたから大丈夫」と强く頷いて、研究の爲に身を打込まれる先生だつた。今迄の習慣もあつてのことだが、先生は常に夜間に研究を續けられて、曉から午に掛けて睡眠をとつてゐられた。この先生の御努力は何の爲であつたか。教壇で私達學生の爲にされる講義の內容を最上にして下さる爲、廣く文學を研究される爲、又、畢生の御事業であり「これが俺の墓だ」と、日頃言はれた人形淨瑠璃史完成の爲に他ならなかつた。この精神力に富まれた先生も病の爲に徐々に御身體を惡くされて行つた。特にこの春以來はそれが眼に着くやうになつた。教壇に立たれる時の息苦しさを隱されぬ程に御病氣は進んでゐられた。それでも先生は「暫らく休んで養生なさつては」と懇願する私達に微笑まれながらも教壇に立つて、私達で用意するコツプの水に喉をたすけつゝ講義を續けられた。

かくも眞劍に盡して下さる先生を私達は胸をつく感激をもつて拜してゐたのである。教へられるものとしてこれに勝る幸福があらうか。

若松町の停留場から早稻田の方へ坂を少し下りて右へ入つたところに原町の御宅があつた。「先生」と聲をかけると、和服に寬いだ先生が、思做、體を前に屈め、いつものあのぐりくしした優しい兩眼に笑みを湛へて出て來られ、「おあがり」、きつとかう言はれる。あの「おあがり」が今でも耳に附いてゐて離れない。私はいつもあの一言を期待して御訪ねし、それを聞いて張合ひを感ずる。御留守でそれが聞かれないときは、何だか情なくなつてあの袋小路を出るのであつた。「おあがり」を耳にすると私は遠慮せず直ぐ上る。いつものことで先生に言はれぬ先きに、胡床を組んでゆつくりして先生に對する。

この時の先生は教壇の先生ではない。慈父といふ言葉は

この先生を表現する爲に造られたのであらう。終始にこ〳〵して若い私の往々にして軌道を外れたであらう氣焰を、首を傾げ、眼を斜めに見張り、口を一文字に結んで、熱心に聞いてゐられた。聞き終ると、深い御經驗に基いて種々注意を與へ、いつもきつと、勵して下さつた。私は世の中がいやになつてきた時など、沙漠に泉を求める氣持ちで先生のところへ出向くと、面會日は決つてゐるのに、他の日でもお忙しい中を快く會つて下さつた。玄關を出る私の顏はいつも生返つてゐた。

私達德川文學を研究する十數人は先生を中心にして「德川時代文化研究會」といふ集りを持つてゐた。每週木曜日の夜、先生の書齋に集つて西鶴の輪講をしたが、私達より先生の方が却つて御熱心で、常に詳細に準備をしてゐて指導して下さつた。私達にはこの夜がどんなに樂しいものであつたか、到底筆には表はせない。だから豫定より一章位餘分に進んでしまふことが往々あつた。そしてその後いつも種々座談になつたが、これも亦非常に私達の爲に成つた。これを休暇中も續けて下さるといふ御熱心であつた。

この會も今は持てなくなつた。先生の御逝去後、やはり木曜の夜に、御骨を圍んで「好色二代男」の輪講をしたが、意味不明のところへ行つても、先生は解決を與へて下さらなかつた。私達各々の胸には熱いものが込上げて來るのであつた。

病床での先生は實に大きな人格であつた。喘息の苦しい中で、さなきだに神經の尖つてゐる筈の御病體で、不行屈な私達の御看護にもいやな顏一つされたのを見た者がなかつた。然も、私達の一々の行動に「ありがたう」を必ず繰返された。言葉が御不自由な程惡化したときでも、こゝろもち頭を下げられた。先生のこの感謝して下るお心持が實に物體なくて、心から有難かつた。私達は終始敬愛の氣持で先生に對したのであつた。

六月二十三日午少し前、工藤と私とを御病床(慶應病院)近く招かれて、いよ〳〵いけないと覺悟を示され、「よく勉强してしつかりやつてくれ」と言はれたときには、悲しさ餘つて涙も出なかつた。「きつとやります」、胸が一杯になつ

て、ぎゆつとベツドの鐵緣を握緊めた。

かうした覺悟をしてゐられた先生は超えて二十九日午前一時四十五分、御身の方、御友人、又可愛がつて下さつた私達數名に見取られて眠るやうに最後の息を引取られた。實に、安らかに大きな御最後であつた。然し私には、先生が亡くなられたといふことが未だに信じられない。

思へば、いつまでも御元氣で私達を指導して下さるものとばかり思つてゐた先生は今、高野の山深く眠つてゐられるのである。遂に私は先生の最後の弟子の一人となつてしまつた。

私の五尺に餘る身體を育てゝくれたのは兩親であり、文學(特に德川文學)に於ける精神を育てゝ下さつたのは先生である。來年三月卒業する私の卒業論文を見て下さることになつてゐた先生、私はあのやうに樂しみに待つてゐて下さる先生の面影を思ふことを、勵ましともし樂しみともして研究を續けて來たのであつたが、その先生はそれを待たで逝かれた。私は今後、誰に見せようとして研究を續けるのであらうか。

先生のお側に常に置いて戴いて、御宅を自分の家のやうに思つてゐた私だつたから、御生前は隨分我儘も言つて先生に御迷惑をかけた。今になつてみると、すまないことをしたと思ふ。懸替のない慈しみの父であつた。今、かうして書いてゐて眼を閉ぢると、浮ぶのは懷しい先生の面影である。

——昭和十一・九・十五——

葬儀・追悼法會(大阪)・納骨の記

葬儀

訃報傳はるや、文學部長吉江先生を初め五十嵐力、日高只一、窪田通治、河竹繁俊等の諸先生、友人山田清作、伊原敏郎等の諸氏續々弔問され、協議の結果、葬儀委員長に日高只一先生、會計委員に脇峻康隆、山田二郎、猪飼叔藏、鴻池幸武の四君をあげ、庶務には門下生一同があたり、萬端の準備を整へる事となつた。而して同夜は近

親並びに病床に侍つた學生等によつて、又翌三十日夜は一般の通夜を行つた。二十九日午後納棺式を行ひ、棺表の文字は窪田先生、棺前に五十嵐先生の筆で「淨音院文譽松換居士　位」の白木の位牌、棺上生前を偲ぶ黑の喪章に飾られた先生の寫眞が置かれ、香煙煙る周圍は大學初め、學界劇界其他よりの悲しき花で埋盡された。三十日午前落合火葬場に送りて荼毘に附した。七月一日午後近親、親交並びに側近者の告別式を行つた。式は牛込大願寺住職並びに役僧の讀經によつて始められ、式央ばに

弔辭早稻田大學總長　田中穗積

早稻田大學文學部長　吉江喬松

早稻田大學校友會　田中穗積（代讀大島）

早稻田大學國文科學生代表　村崎凡人

德川時代文化研究會　工藤武富

弔電（百數十通讀上略）報告　猪飼叔藏

の諸氏によつて、讀辭、報告あり（式後、矢來町自治會長長岡玄三郎氏よりも弔辭を送らる）續いて近親以下の燒香があつた。午後四時より五時まで一般の告別式に移つたが、門前は花輪で飾られ、黑白の幕の張廻らされた庭に續く道は弔問の人々で絶間なく、庭に設けられた二つの燒香臺から正面の先生の寫眞の前に花に埋れた遺骨を拜して最後の告別をする人々は大學の諸先生を初め、生前親交ありし諸氏、國文科の全學生其他四百名餘りであつた。

追悼法會（大阪）

先生の御出身地大阪に於ける追悼法會は生前親交あつた六氏の發起で、八月九日午前十時より南地法善寺で營まれたが、瀧子夫人を初め近親並びに門下より竹村次郎、猪飼叔藏、工藤武富、鴻池幸武、齋藤修一盛田嘉德の六君參列、式場は諸方より贈られた花で埋つてゐた。式は法善寺住職（代竹林寺住職）導師となつて讀經に始まり、讀經央ばに、

追悼辭　追悼會發起人總代　高安六郎

德川時代文化研究會　猪飼叔藏

弔歌弔文報告　岡島眞藏

の諸氏によつて、讀辭、報告あり、それより瀧子未亡人を初め、近親並びに參列者順次燒香をなし、十一時式を終つたが會するもの百五十名を超えた。更に別室に於て、有志の者集つて故先生の追悼會を催し、床の間に掲げられた先生の寫眞の下に、遺品遺墨を展觀して故先生を偲んだが、その數約百名であつた。午後一時より手向として

地唄　殘月　楯繁大檢校

及同社中

舞踊　菊の露　新町　木原豆奴

淨瑠璃　櫻丸切腹　豐竹つばめ太夫

三味線　竹澤團二郎

があつた。其後追悼座談會に入り、中井新三郎氏の司會で、高安吸江、猪飼叔藏、小西政治郎、食滿南北、鳥江經江、旭堂南陵、福良竹亭、南木芳太郎、金尾種次郎の九氏順次立つて故先生を偲ぶ多方面よりの追悼談があつたが、胸をついて談ずるもの涙して聽くもの、感慨無量の追憶の中に會を閉ぢた。

納骨

先生生前の御心によつて、高野山に納骨と決定。滿中陰の八月十六日、瀧子未亡人令姪初子孃初め、猪飼叔藏、鴻池幸武、盛田嘉德、中村章景の四君、遺骨を守つてお伴し、常喜院に於て讀經後、僧侶と共に納骨堂に至り、再び讀經の中に無事納骨を終つた。かくて、先生は永久に高野山に眠らるゝことゝなつた。

『石割先生謦咳集』抄

猪飼叔藏

はじめに

先生の御逝去後、あの慈深い御聲に接しられぬことが悲しくてならなかつた。然るに、先頃、先生の愛姪初子さんから、大毎時代に新年の挨拶を吹込まれた繪葉書盤のレコードを私達數人に贈られた。私はとびつく思ひでそれに聞入つた。あの先生獨特の口調、永久に聞かれぬとあきらめてゐた私は心から懷しく嬉しかつた。この數言が殘つてゐたこと、特に私にも贈られたことを、深く〳〵感謝した。然し、思へば、その他の聞きたい幾多の御聲はもう聞かれない。今は御生存中の先生の謦咳を想出し、拾集めてさびしさを慰めるより道がない。私は丹念に、想出す毎にその場で書きつけて先生を偲んでゐる。

昭和十一年六月二十三日午少し前、慶應病院のベッドに身を起されて

「よく勉强してしつかりやつてくれ。」

と力强く言はれた御遺言は一生を通じて、決して忘れることは出來ない。

文學研究の態度の話のとき

「正しい批評をしようと思へば、何だこんなもの、例へば西鶴の奴が何ぢやいといふやうに、頭からのんでかゝらなくては駄目だ。惚れてかゝつたが最後よく見える。」

講談に代つて大衆文藝が最初に新聞にあらはれた話の出たとき

「朝日では白井喬二に白羽の矢を立てたのだが、白井が都合で書けなくなつて、行友李風が最初に書くことになつた。」

（註、例の朝日新聞の「修羅八荒」）

役者の好き嫌ひの話のとき

「歌舞伎役者の中で誰が好きかと聞かれても返事は出來ない。誰の何が好きだといふ返事なら出來るが……。例へば菊五郎の『賤機帶』といふ風に……」。

例の德川時代文化研究會の輪講會の夜だつた。文中、なかびくの顏の女のことが出てきたとき

「俺はさういふ女の顏が好きだ。」

と言つてにつこりされた。

食物の話が蕎麥に及んだとき

「蕎麥の味を見るなら、はなまきに限る。あれを食ふとき、中味の蕎麥だけ食つて汁を殘したら、後で、あの客は食ひ方を知らんと笑ひ居るぞ。……東京では本鄕のやぶが一番だ。だが、近頃は少し惡くなつたやうだ。」

（私は先生の御言葉を一つでも多く聞きたい。この氣持を汲んで、先生の一言なりともお知らせ下さらば、喜びこれにまさるものはない。皆樣に衷心からお願ひする。）

●村井順「若紫研究」◎

源氏若紫の卷研究について

鷲見利久

村井氏は我が「國文學研究」の第一輯に「桐壺」「帚木」を、第二輯に「空蟬」を、第四輯に「夕顔」を書き、而して今その續篇「若紫」を書いた。斯く續けざまに勞作を發表してゐるのは、氏をおいて他にない。私は氏の眞摯な努力に對して先づ敬意を表する。

私は氏の論說を見て、相變らず落着いた氣持で、しみじみ「源氏」を鑑賞してゐる態度を心にくくも思つた。原文を十分に讀みこなすことは、當然すぎるほど當然な事であるが、實際としてはなかなか爲し難いことで、とかく概說や梗概で間に合せ、或は原文を十分讀みもせずに、索引を使つて器用にレポートを作り上げるといふ怠惰者にとつて氏の如き眞摯な態度は誠によき敎訓である。

氏は最初に「若紫」のプロットについて考察してゐる。或人物が偶然或る事柄を發見した爲に、思はぬ事件が發生して、筋が展開して行く趣向又展開して行つた筋が發見で結末をつけるといふ趣向、この發見のプロットを源氏の作者が如何に屢々用ゐてゐるかといふことを例證してゐる。これは『源氏』を一通り讀んだものの誰もが感ずることであるが、しかし氏は尙その上にこの發見のプロットが何故に斯くも屢々用ゐられたかといふ點について考察して、これは當時の社會生活そのものに、此のプロットに似たものがあつたからである、卽ち女子が成長すれば兄弟は勿論父親にさへ顏を合はせることの少かつた當時の極端な深閨生活が原因であらうといつてゐる。これは聞くべき妥當な意見で、當時「見る」といふ詞に男女關係の意味が含まれてゐたことも、この消息を語るものである。かかる隔絕した生活をする男女を接近せしめ、事件を展開せしめる手段としてこの發見のプロットが屢々用ゐられたといふことは又自然である。だが問題はむしろ作者がいかに巧妙に自然にこのプロットを用ゐてその藝術的効果をあげてゐるかといふ點にあるので、そこを究明すべきであらう。

次に氏は源氏と藤壺、源氏と葵の上及び源氏と紫の上について、大體筋を追つて說明してゐる。源氏が瞼の母によく似てゐる藤壺を戀ひ、藤壺と同じ血のつながりで、これと酷似してゐる紫の上に對して、藤壺にとげられぬ戀の情念を盲目的に注いで行くといつた經緯を、流暢な筆致でよく語つてゐる。私は源氏の母の幻影を追ふ心を、フロイドの言葉でいへば、マザー・エデヰポス・コンプレックの表現であると思つてゐる。尙氏は葵の上についても、源氏との夫婦關係の圓滿に行かぬ原因を性格の相違の上に求めてゐる。だが源氏と藤壺との物のまぎれについて說く所のないのはどうした譯であらうか。「若紫」に於て見逃すべからざる重要な事件としては、幼い紫の上が源氏に得られるまでの事情と、他の一つは、この物のまぎれとである。そしてこの後者が『源氏物語』全體にとつて重要なことはいふまでもない。

次に氏は「同型の構想」について語つてゐる。そして「若紫」が「夕顔」に較べて感興の甚しく劣ることを述べその理由四つを擧げてゐる。氏はいふ、第一は、藤壺戀しさの餘り幼い紫の上をさへ得ようとする源氏の心を作者はしつかり握つて居なかつた結果だと思ふ。もつと突込んで源氏の心理を描いたら、きつと情味の豐かなものとなつた筈である。第二には、この卷以前にも源氏の藤壺を戀ふる心をもつと濃厚な伏線として描くべきだつたと思ふ。それが足らぬため、讀者の源氏の心に對する理解が十分でなく、突如として起る此の變態的行爲の因果關係はわからぬところから、源氏に働く同情は薄いのである。第三は、初の方に横はつてゐる、あの長い「須磨」「明石」の伏線である。第四は、此の卷は「夕顔」に非常によく似た發見のプロットであるが、しかも「夕顔」ほど獵奇的興味をそそらない。以上の四つは見解である。いかにもと傾聽される。成程「夕顔」に較べると、事件としてはいかにも單調である。しかし私は作者の意圖した心理はあのまゝで十分表現されてゐると思つてゐる。そして事件としての味ひよりは、その背後にある一つの心相がはつきりと浮んで來ると思つてゐる。この論文に於て尙この上に作者の意圖を闡明し源氏特有の表現について論ずるところがあつたならば、尙更結構であつたらうと思ふ。『源氏物語』の卷々には相當むらはあるが、おのづからそこにプロットの起伏があり、又これあるがために文が面白くなつて居る。この卷の初めにある家來たちのする諸國の名勝の話や、前播磨守の娘の噂などは、長過ぎるといふ非難は一應尤であるが、文としては一種の伏線をしてゐるとも思はれる。

最後の『宇津保物語』との關係の考證は、氏の創見であると思ふが、やゝ部分的類似にとらはれて、全體的關係を見失つてはゐないだらうか。

要するに同氏の論文はさすがに原文をよく讀み、頗る優れたものである。文は平明暢達で『源氏物語』を新釋して面白く讀ませてゐる。たゞ慾を云へば、もう一歩作の內奧に突入つて貰ひたいと思ふが、どうであらうか。指定の紙數は盡きたので筆を擱く。妄言多謝。

發見のプロット

原田敏雄

村井順氏が「國文學研究」第六輯（四〇頁）で、

大袈裟な物言ひをすれば、源氏物語全卷の構想は、殆んど全部が發見のプロットであるとさへ言ひ得る。

と、言はれるのは正しい。又、當時の社會生活そのものが此のプロットに似たものであつた爲當時の……極端な深閨生活が、此の物語に發見のプロットを屢用せしめた大きな原因であらうと考へられる。

と、生活型態に結び附けて論ぜられたことも正しい。然し老婆心から念のため注意したいことは「發見のプロット」といふ形式が、源氏物語にのみ限られたものではないといふことである（村井氏も恐らくそれを承知して居られると思ふ。）氏は「國文學研究」第二輯「空蟬の卷研究」に、「前代文學の影響」を書いて居られる。又、第四輯「夕顔の卷研究」及び第六輯「若紫の卷研究」に於いて「空穗物語

の影響」を詳しく述べられた。

然し發見のプロットはこれだけでない。竹取の翁が、竹の中から、なよ竹のかぐや姫を見つけたのと、源氏君が此山で、圖らずも美少女紫上を發見したのと、「發見」の意味は同じであると思ふ。プロットの意味を私が間違へてゐたらお許しを乞ふ。泊瀬で老右近を發見した玉蔓は自らの幸福を招來するが、今は亡き我子の幻をその塚の上に發見した謠曲「隅田川」の狂女は悲嘆の淵に泣き沈む。獨歩の「運命論者」の主人公は以外な事實を發見した。源氏と玉鬘との關係が親子でなかつたといふのと自分の妻が自分と腹違ひの妹であつたといふのとは、逆にして同種類の「發見のプロット」ではあるまいか。今泉の帝が夜居の僧から、母親の祕密を聞かされて懊惱するプロットと、ハムレットが母親の不淫を知つて煩悶するプロットとは、共に「知らざりし方よかりしものを」と言ひたい所であるが、祕密を發見しなければ、筋が成立しないイブセンの「幽靈」に出て來る娘のレジーネは自分の愛人オスワルが、腹違の自分の兄であることを發見して家出してしまつた。父の惡性の病氣を受けついでゐることを知つたオスワルは、母親の面前でモルヒネを弄びながらかう言ふ。

だつて僕は、あなたに僕を生んで下さいと頼みはしませんでした。それにあなたが與へて下さつた生命は、どんなものだつたでせう。僕はもうそれに入用がないのです。あなたに返してしまひたいのです

宇治十帖の主人公薫君が現代に生れかはつてゐたら、きつと吐いたであらう科白である。河竹默阿彌の脚本などには、發見を豫想しての紛失或は隱匿のプロットとでも言ふべきものがある。實母と知らずして結婚した希臘のオイデッポス王が事實を發見した例をここに引用することは餘りは古からう。

源氏君は紀守の家で、几帳を障子口に立てて、火はほのぐらきに、たゞ一人、いとささやかにて臥したる空蟬を發見した。菊池寛の「第二の接吻」では、かくれん坊のカーテンの蔭に、圖らずも自分の戀人を發見する几帳がカーテンであり、垣間がドアの鍵穴であり、かたたがへがかくれん坊である。

「發見」或は「發見のプロット」といふものは、古今東西の多くの物語又は小說戲曲に大切な一要素といふべきではないか。「源氏物語」の場合、發見の樣式方法が、深閨生活といふ時代の樣式に律せられてゐると斷ずることは、より正しい。發見のプロットを巧みに織成して、發見は發見を生み、プロットはプロットを生じて、次から次、縷々として筋の盡きない趣が源氏物語の長篇たる所以の一つでもあり、短篇を集大成して――短篇を止揚して長篇を生み出した式部の手腕でもある。村井氏が此の形式（發見のプロットといふ形式）は初期の卷より後記の卷の方に、一層技巧の老練さが見出されるといふことが言へる……

と記されたのは正しい。芳賀矢一博士は「國文學史十講」（一一一頁）に、

殊に宇治十帖の人物を現し出した手柄は、始めの四十四帖より手際が進んで居るやうに思ひます。

と言はれた。果を發見して因に苦しむ回顧式手法と、因を發見して果を恐れる開展手法とは、共に悲劇の成立に重要なプロットである。嘗て故山口剛先生が「夕顔の卷」に探偵小說といふ言葉を用ゐられたことが思ひ合はされる。「發見」は探偵小說の生命である。源氏物語全編の構

想が殆んど全部發見のプロットであるとすれば、源氏五十餘卷の、讀者をうまさない理由が、その探偵小說風の手法にあるとされたこともうなづける。

「發見のプロット」といふことは、物語又は小說の本質にも觸れる重要な問題である。これを標準にして、源氏以前は源氏の先蹤、源氏以後は源氏の影響といふことが出來れば面白いがそれは冒險である。然しここから物語の型態の胎生發達を論ずることは出來る。

村井氏は「源氏と藤壺」の項で

我々は藤壺といふ大切な存在に對して今迄餘りに冷淡であつた。

と言はれる。同感である。物語の女主人公紫上にまで至る橋がかりとしても——勿論それだけではないが——藤壺の存在は重要である。藤壺なくして紫上は發見されない。

ついで氏は、

彼（源氏）が藤壺を慕ふ心は最初は單に險の母を懷しが氣持であつたが、それが濃くなり、程經るや、自分の妻葵上の位置に藤壺を置換へて考へる樣になるのだつた。

と言はれる。至言である。源氏君のこの心理過程は、フロイドの學說からも說明される。

藤壺を懷しむの餘り遂に彼女に道ならぬ戀をするといふことは、何といふ奔放な、因襲を無視した行爲だらう。（四四頁）

この行爲の主人公も、紫上に對しては、少女であつたが故に、動物的な醜さから救はれることが出來た。

源氏は紫上を自邸に連れて來ても、夕顏の場合の樣に戀を語らふわけには行かなかつた彼は此の奇妙な戀人の爲に……共に離の屋などを造つて遊ぶのだつた。（四八頁）

紫上を、難波津すら書き得ない十歲ばかりの少女として此の卷に登場させた式部の技量は、アメリカのテンプル孃を發見した映畫監督以上のものである。紫上の成長と共に、物語が成長する。空想家、理想家、狂熱家、冒險家、源氏の性格の多樣性から、物語に描かれた戀の種々相は產み出されたものである。桐壺更衣から藤壺へ、藤壺から紫上へ、この一線には重大なものが匿されてゐる。

村井氏が所謂一卷一話主義で各卷毎に一帖づつ丹念に檢討して居られることが嬉しい。恐らく最後の卷までこの方法で繼續される心意氣であらう。私はその覇氣に敬服する。然し各卷毎に同じ形式で論ぜられるとしたら、やがて行詰りを生じないだらうか「夕顏の卷研究」に於ける「空穗物語の影響」の項に比し、「若紫の卷砂究」に於けるその項の存在價値は半減される。願はくは折角工夫されて、全編に一貫した統一を保ちつつ、各卷にそれぞれ異つた特色變化を與へられんことを。

優れたる批評は、その創作に等しき、或はそれ以上の價値をもつ。一つの創作を批評するには、それを創作すると等しき力或はそれ以上の力をもたねばならぬ「玉の小櫛」あり「評釋」ありと雖も、不幸、私は「創作源氏」に匹敵する程の「批評源氏」を未だ見ず。宣長廣道の後に出でて、宣長廣道以上のものたらんことを、村井氏に切望する。（昭和一一、七、二八）

暉峻康隆「西鶴町人物論攷」

康隆さんのお説を讀みて

座間太郎

康隆さんのお説は論旨極めて明快、些の晦澁の跡も認められない。視點も確實且つ剴切で、町人物をあのやうにこなし切る手際はまことにあざやかなものだ。

が併し、特に永代藏に於ける西鶴の描寫は富の蓄積過程の一面的な抽出であつて、全體としての人間生活の直接的表現ではなかつたと云へないだらうか。もちろんこの書の題名の示す如く町人の致富道を示すものであつたからには違ひないが、その致富道に就いての西鶴の見解を闡明することのみによつて彼の對人生的態度、その文學的價値が果して決定し得られるであらうか。

正貨減少の原因を富の死藏にありとしたのは西鶴の卓說と思はれるも、巨商の凡てが富の死藏を目的としたか、そして又西鶴自身もこの死藏を以て窮極の手段としたかと云へばむろんさうでない。「人は十三歳迄はわきまへなく、それより廿四五までは親の指圖をうけ、其後は我と世をかせき、四十五迄に一生の家をかため遊興する事に極まれり。」よく引用されるこの言葉は彼の持論とも見るべく、卽ちこれによつて富の獲得と共にその消費の方面が閑却されてゐなかつたことを知る。富の消費が遊樂にのみ向けられたことは當時の社會事情、町人の階級的地位から考へて無理ならぬことゝ思はれるが、しかし彼はこの二つの面、財の獲得とその消費との相關に於いて人間生活の全面的現象を把握し、更にこれを根本的な人間の本能——經濟生活に於いて現はれる物慾と、享樂生活に於いて現はれる性慾とに還元しようとしたことは注目すべきである。

康隆さんが西鶴の諦念を彼の病後の肉體的衰弱と共に、經濟生活に於ける彼自身の理想と現實との對立から出發したものと說くのは傾聽に價する。が同時にこの諦念は、もつと廣い意味で作者の對人生觀的態度のうちからも導出されるのではなからうか。卽ち人間生活の根底を形成する本能の力を、必然的な、人間として抵抗し得ざるものとする一種の運命主義的な觀念がそれである。そしてこの悲しむべき現實を前にして彼は諦念の深い觀念を瀉したのではなかつたか。而も西鶴はかうした彼の運命觀を抽象的に概念化することなく、冷酷な現實の世界に對してどこまでも觀照的な態度を持した。そしてこの故にこそ彼の作品が單純な教誨的意味か或ひは事實の報道に終らずして、すぐれた文學的領域を開拓し得た所以だと思ふ。

「寓言と僞とは異なるぞ」といふ西鶴の文學理念を「團袋」の中に求め、これによつて町人物の寫實的方法を證明しようとしたのは康隆さんのお手柄に歸せなければならぬが、これは町人物に限らず他の諸作に就いても適用されてよい言葉であらう。西鶴が二代男の首章で、當時行はれた遊女評判記乃至遊里案內記の類を批評し、「見聞計りにておかしからず」とし、更に「見及び聞傳へしは松の葉の塵なれ

ば、祇園箒の跡までも心の奇麗なる事ばかりあらはし、よしなきことははき捨る物にぞ」と云つてゐる如く、彼は意識的に見聞以上のもの、いひ換へれば眞實のすがたを文學の中に表現しようとしたことを認めるのである。文學の現實性とは、その文學の取扱つてゐる現實の世界の深みの强弱によつて決定されるのでなく、作者がその現實の世界に對して持つ態度の如何によつて決定されるものだとするならば、作者自身の興味があまりに露出し過ぎてゐると云はれる好色物に於いてもわれわれはその現實的な限界を新しく把握することができるであらう。この點に就いて康隆さんの今後の創見を大いに期待する。

書かでもがなのことを書いて了つて何とも恐縮の次第だ。他山の石と見て呉れれば小生の多幸である。

西鶴町人物研究

佐藤喜一

文學する良心がリアルな精神ときり離せず、勿論、浪漫主義のなかにもリアルな魂は輝く。

今日の如く、嗟惡で絶望的で不安な醜惡な世相にあつては、更に眼をそむけず現實に對する不敵な身構へと汚穢に泥まみれになりつゝも清潔の精神を保つべく、いかにして鬪ひうるかの追求にあたつて、最近の眞面目な「西鶴論」者の姿があつた。

暉峻康隆氏の「西鶴町人物論攷」はその烈しい熱情と豐富な眼識を備へた論文として眼を奪はれた。

今までの多くの、それも就中新しい態度をもつて武裝してゐる西鶴愛好家或ひは研究家の論稿にみられた町人物研究は、永代藏、置土產、織留、胸算用を竝列せしめ、それをひとまとめに眺めた上で結論を抽出する方法とは異り、「永代藏」の積極的な西鶴の追究精神をとりあげ、商業資本主義擡頭下に於ける一作家のいかに時代と社會に身を處し苦惱し鬪ひやぶれたかの悲劇の眞骨頂を探求しようとかゝつたものである。

そこからまづ「永代藏」にみられる致富道の本質を明らかにすることによつて積極面を語り當時の思想家經濟學者と比肩して何等の損色を社會認識に見出すことは得ず、正貨減少の矛盾を正貨が大商人の手に死藏蓄積されてゐると暴露し、致富の基本となる資金獲得のための努力が語られ、正しいものを欲し、眞實を尊ぶ西鶴の理想と現實のギャップに對しての苦悶を受取る。

資本獲得の種々相と共に資本運用の種々相を西鶴はいかに認識してゐたか、交通手段の發見が新しい投資部面を開拓すると同時に、交通手段そのものがまだ優れた投資部面たりうるといふ交通經濟、鑛山事業への投資、開墾投資、農業經營において勞働能率を增進せしめる道具機械の改良、利が利を生むに至る「親ゆずりの銀」と彼のいふ固定化されてゆく資本等の把握の中にまれにみる西鶴の洞察力を發見した。範圍を擴大した研究方法は遺憾なく發揮された。

そこに氏はどんな創作方法と思想を感じたであらうか。

「俳諧團袋」中の一家言「寓言と僞とは異なるぞ、そそなたくみそ、つくりことな申しそ」にその解答「寫實主義的文學に於ける表現の方法」を裏付けた。

町人物論攷の努力の大半はこゝまで述べられた感がある。西鶴の文學に現れた商人と近世經濟學とをこれほど詳細綿密に揮然とこなし得た勞作はたしかに敬服に値する。

最后に氏は、元祿二年以後病床につかれ、死の影まで堪へた老衰西鶴のベットに手をさしのべて、西鶴の諦念の世界を分析すべく連れだすのである。

その安らかな諦念の境地からわびしい安住の世界「貧しさに打挫がれながら堪へに堪へて、全盛の昔の意氣を失はぬ男達のけなげさ哀れさを描いた置土產の涙をたゝへた佗しい境地が生れ出た」そして氏は、西鶴の觀念の世界に沒入せざるを得なかつた作家的人間的懊惱をみ、リアルな作家の悲劇を觀じた。

私は氏の此の論文を絕えず謙虛な氣持と併行してよみ終ることが出來た。そして何故にあのやうな嶮しい現實相に向つてふてぶてしい眼を燃やし、醜にかみつき、矛眉と惡の摘發にこをどりした、美しいリアルな魂が無慘にも敗北するに到つたかを氏と共に痛ましく思つた。

氏によれば重患後の作品「胸算用」その他はすべて「永代藏」に較べて弱々しい「資本の固定化、個人的能力の否定と云ふ嶮しい絕壁を攀ぢ登らうとする不可能な努力を捨て」それが「論理的發展でなかつた爲に」觀念の世界に沒入したと語られる積極面について大半の勞力がなされたゝめか、この部分は力弱く吐切れたやうに考へられ、更に大きな問題にまで今後すゝむ部門に足をふみ入れたやうにも思へた。

もとより國學が正統な發展をとげる以前の思想界に生れた西鶴である、儒教、佛教、神儒佛の三教一致思想といつたものが當時の武士支配の社會の各層に單純な姿において浸潤してゐたのであつてみれば、いかに西鶴が眞實を愛しやうと聲を大にして叫ぶ反封建的イデオローグたり得た筈もない。それだけに、現代のやうなリアルな精神を片つぱしからへし折つて泥沼に投げ込むやうな時代に、氏の立ち向ふ研究の必要が困難さを通じて切實な結びつきをもつてありうる。

西鶴と兼好の位置の顚倒を述べたところも興味深く、資料的な引例から敎へられる點が多かつたことを附記したい。

大崎正「發生的見地に於ける短歌の本質」

感想にならぬ感想

横山青娥

短歌形式が旋頭歌形から進化したとする說の妥當性は、あらゆる觀點から裏書きせられるものであるが、その結論を急ぐならば旋頭歌形が夙く衰へて、短歌形ひとり隆盛を極めた事實だけでも澤山だとおもふ。乃ち、旋頭歌の反覆句たる七言一句が省略されて、短歌形が生れたところに進化論的說明が適用され得るからである。

「國文學研究」第六輯に於ける大崎正氏の「發生的見地に於ける短歌の本質」と題する論文は、その渾身的努力の凝集として洵に尊敬に値するものであるが、その觀點がやや偏倚してゐはしないかと考へる。乃ち、五七調を餘りにも過重視してゐてそれ以前に五七五七七の形式が

韻律的に如何なる價値を持つてゐるかを究明することを懈つてゐるはしないかと愚考する。換言すれば歸納的方向に物を考へることが足りないと思はれる。單一に五七調だけの特質を論じてゐては、短歌の眞髓は把握されないやうに思ふがどうであらう

五七調と七五調、この問題については、私は曩に第四輯に於て論じてゐるので、大崎氏の疑點に對しては、おのづから解答を與へてゐるものと信じ、今こゝでは論じないで置かうと思ふ否、むしろあの論文に對する批評を大崎氏からきゝたいとも惟つてゐるのである。

あらゆる角度から物を觀るといふことは大切であるが、それが爲に却つて單純なものを複雜化することもあり得るので、これまでの學者が五七調の發生に對する考察の如きもこの弊に落ちてゐた。かといつて大崎氏がその轍を踏んでゐるといふのではないが、論題が短歌の本質に限定されてゐる以上、いさゝかどうどうめぐりをしてゐる感がしないでもない。

これだけでは批評にも何んにもならないけれど、氏の論文は未完のまゝであるし、詳しく讀み返してゐる時間もなくなつたので、これで許していたゞきたいと思ふ。

ただ、これは極く末節であるが、氏のあげられた。

山代の　筒木の宮に　物申す
吾が兄の　君は涙ぐましも

のいふ一首は、第三句切ではなく、矢張り第二句切であらねばならない。乃ち第三句は第二句に關聯を持つものではあるが、こゝでは第四句により多くの緊密性を持つて「物申す吾が兄」といふ意味でなければならないからである。この一首については曩に染谷氏も第三句切のやうに解釋されてゐたやうに記憶するので、末節にかゝはるやうであるが識者の是正を待つ意味でこゝに指摘さしていただいた。

●國分保「用明天皇職人鑑考」●

用明天皇職人鑑考に就いて

角田一郎

國分保氏の「用明天皇職人鑑考」は國文學研究第六輯中最も興味深く拜讀したものであつた教へられた事、示唆された事ども頗る多かつた。第三章の繪入細字本表紙見返り繪と詞章との精細を極めた照合、第四章の謠曲道成寺を近松が取上げた意味について、情の解放といふ事から時代の寫實的傾向にまで持つて行かれた洞察などには敬服の外なかつた。第五章出語出遺について、出遺が出語よりも先に發生したとの考證には、その結果に於て諾かれるものがあつた、多少穿ち過ぎかと思はれる節々もあつたが、私はいろ〳〵な點で論者に敬意を表する。こゝには五つの疑點について述べたいと思ふ。

一、第五章出遺發生の理由に人形の動作を自由にする爲に匂欄から離れたといふことを附加されたが、これにはどういふ根據があるのだらうか。氏の引用された「御前義經記」『棠大門屋敷』の外、よく知られてゐる操年代記の、

辰松八郎兵衞出づかひ身振よく、見物の氣を取つて云云

竹豐故事の、

出遺ひは辰松八郎兵衞に始る

此人古人の達人にて手摺を放れて無量の手段を遺ふに全身少しも亂るゝ事なし京大阪に譽れを取云々

等に至るまで、見物が喜んだ點は遣ひ手の姿態にあり人間の動きにあつたことは考へられるが人形の動きが自由になつたことについては何等の資料を持たない。或は右の竹豐故事の「手摺を放れ無量の手段を遺ふ」といふ點を指されてゐるのであらうか。其の文の主想は「全身少しも亂るゝ事なし」にあつて、それは辰松自身の全身であり、又其の文からは「手摺を離れなければ無里の手摺を遺ふことが出來ない」といふ意味は出て來ないと思ふ。

二、第二章の全文について末尾に「義太夫と近松と提携した竹本座の環境的必然と當時の社會的趨勢と淨瑠璃界との關係を概略望視した」と言はれてゐるが、かうした廣範圍に亘るものの概說を僅々十頁に收められた努力には敬服の外はない。私の希ふ所は、こゝに扱はれた諸問題について今一般の取捨選擇と整理とである。概觀の目的が第一章冒頭に說かれた外的情勢よりする研究への基礎を置く事にあるのであらうから、その目的的態度をはつきり示したものであつてほしかつた。最初の筑後掾修業經營についてみても更に更に簡單でよかつたのではないか。こんな事を私が思ふのも實は此の章の各節に小見出しを付けようとした所が實にそれが困難であり、又それ等各節の關係が把握しにくかつたといふ自らの鈍根からであつた。

三、第二章の近松「底意を作る」の說にもいささか疑點が感ぜられた。第一に、氏が「近松の云ふ所の女形法、作意といふものは（中畧）男が女形として寫實的な女の科をする場合に心得べき事柄なのである。」と說かれたことについてである。成る程發生的にみて、女優禁止若衆歌舞伎禁止の條件下に發せられた女形法であり、作意であり、「底意を作る」の說ではある。又、氏の引用された近世江都著聞集のあの分は、女形である男性瀨川菊之丞が女形の心得を說く爲に近松の語を引いた個所ではある。が、だからといつて、近松の女形法「底意」といふ事が女優と若衆との禁止を條件とすべきであつたとは言ひ切れない。案外女歌舞伎であつてもそれが演劇として發展して來て近松の手にかかつた際、矢張り、「底意」の說が出た筈のものではないか、卽ち演劇一般論上の女役についての近松の主張なのではないか。

それは私の第二の疑點「底意」そのものの解釋に關聯するあの江都著聞集からの引用文末尾を私の次のやうに解する。原文に私の解釋上の補說を加へて示す。附點が加筆。

是底意を作るといふ狂言の法にて、底意を作るとは女の心の底に祕められたる思ひを上べに顯はし見することにしてこれは作者の働きなり。

更に難波土產所載の近松の語について見る。括弧內は私の補說淨瑠璃の文句は皆事實を有のまゝにうつす內に又藝になりて實事になき事あり（卽ち寫實を本體とすれども、舞臺上の藝としての必要上時に寫實を離れたる文句を作る。例へば）近くは女形の口上おほく實の女の口上には得いはぬ事を打出していふゆゑ其實情があらはるゝなり（卽ち女形につきては寫實を離るゝ所に却りて眞情のあらはるゝものなり。其の理由は）此類を實の女の情に本づきてつゝみたる時は餘の底意なんどあらはれずして却て慰みにならぬ故也（卽ち女性の役を寫實的に演

じては、女性の慎しみ深さよりして心の底を明さぬ故、見物には女の眞情一向に解する能はず、興味無ければなり。）

（註）「餘の」は大阪語の「餘の事」「餘の話」などの「餘の」で「其の外の」「全然別個の」といふ意味であつて

こゝに「餘の底意」とあるのは「實際に女性の言動に表はれるのとは別の眞の內心」と私は解する。

元來難波土產の近松の語は女形の舞臺上の言動が寫實を離れ眞を離れたことの批難に對する辨解と主張なのであつて、要約は「外面は寫實ではないが、內面の眞實を表現したものだ」といふにある。內包されてあるべきものを外延的規約を破つて出現させる事が浪漫的なるものであるならば、この近松の態度も一言して浪漫的といはねばならぬ。その元來の內包について眞實であるといふ事だけでは寫實とは云へぬ。如上の解釋よりすれば「底意を作る」ことは寫實主義ではなく、誇張法である。むしろ浪漫主義的なものである

こゝで再び第一の疑點「近松の女形法が男優の女形を條件としたものか否か」といふことにかへる。難波土產に用ひられた「女形」なる語は、(イ)歌舞伎の女形に例をとつたので、「女形」は男優の扮する女形といふ意とも見られるし、(ロ)全文が淨瑠璃の事であるから操の人形を指して居るとも見られる。其の何れにしても、實の女のまゝに演じては眞情の覗ひ難いことに變りはない、卽ち一般女役についての說と考へられる所以であり、色を見するを本旨としたらしい阿國歌舞伎若衆歌舞伎にしても、若しそれが禁止されねば演劇としての發展をも示したであらうし、近松の「底意を作る」のこともあてはまつてくるであらうとの推測もつくのである。誇張法である「底意をつくる」ことは人形においては、目千兩などの表情がないだけに殊に必要であつたらう。この女形法が一體歌舞伎から出たものか人形操から出たものかといふ事も考へられねばならない。更にかく純粹な演出的考察ばかりでなく「好色一代女」などの女性の性的心理の暴露が、舞臺の上に煽情的興味として使用されたことをも考へねばならぬ。かたゞ〳〵男優の扮する女形とかいふ事にまで考を進めたくないのである。

四、同じ第二章の寫實といふ語について。同じく寫實といふも世話物と時代物とは大いに異る。又「出世景淸」の新淨瑠璃といふのについて寫實主義といふ時は、それも亦異る。少くとも淨瑠璃の寫實といふものについては

（一）過去の時代に題材を取つて、その過去の時代に於ける人情風俗に卽した寫實を爲す所の想像的寫實。

（二）過去の時代に題材を取り過去の時代として扱ひ乍らも、現在の人情風俗の寫實をあてはめるといふ假設的寫實

（三）現在に材を取り現在の人情風俗を寫實する所の本來の寫實。

この三者が區別されねばならぬ（一）（二）は時代物の寫實であつて、寫實的な意圖と外形とを持ち乍ら、本質的には空想的であり浪漫的なるものである。難波土產の近松が語「實事を有のまゝにうつす」といこのは、右の三者をひつくるめたものであつた。又「出世景淸」を轉機とする新淨瑠璃を寫實主義といふのもどうであらうか。古淨瑠璃の說明的叙事的構成に對して描寫的劇的構成といふものが「出世景淸」までに次第に釀成せられて來てゐた。それをはつきり

と認識したのが、新淨瑠璃の意義ではなからうか。その描寫的劇的構成といふ中には、空想的浪漫的なるものも許容される。「出世影清」はじめ時代物がそれである。とすれば、これらをおしならべて寫實又は寫實主義といふ語を以て論ずるのは危險ではないか。たとへ時代の寫實主義的傾向といふものが此のすべてに一貫してゐるものであつても、そこで近松物においては寫實、寫實主義、寫實味、寫實的傾向などの語が餘程愼重に區別して使はれねばならない。

五、最初に、第一章の冒頭に述べられた研究法上の御所說についてであるが、あまりに單味一方の處法であつて、外的研究より生ずる概念的設論が出て來はしないとかの疑念が挿まれるのである。此れは他日淨瑠璃研究法について自分の考を纏めたいと思つてゐるから、ここには省く。

以上私の誤解が多からうと思ふ。重々國分氏に對して失禮を謝すると共に、氏並びに諸方の御教示を乞ふ次第である。

早稻田大學國文學會編　季刊　國文學研究　（定價二圓五十錢　送料四十錢）

第六輯內容（菊版四〇〇頁・六月二十九日發行）

竹取物語研究……金坂豐
「若紫」の卷研究……村井順
方丈記研究序說……築瀨一雄
近古小說覺書……佐々木八郎
西鶴町人物論攷……暉峻康隆
日本近代リアリズムの特質……佐藤良邦
二つの道の追求者有島武郎……渡邊竹二郎
發生的見地に於ける短歌の本質……大崎正
上代歌謠の展開と律的現象……橫山青娥
催馬樂研究……辰井正明
宮井傳右衞門と近松……安藤常二郎
「用明天皇職人鑑」考……國分保

●第七輯近日刊行●

發行所　早稻田大學國文學會
發賣所　東京日本橋丸善株式會社

映畫寸評

地の果を行く

○デュヴィヴィエは兎も角寂しい人間を畫く。我々は「商船テナシティ」以來數度彼の作品に接したのであるが、定つた人間の姿が浮び上つて來る。「地の果てを行く」の主人公も又その例に洩れない。罪に追はれて外人部隊に逃げるその人には最早未來はなかつた。が僕等は此處に考へられさうにもない密偵の姿を發見しなければならない。その結果はメロドラマから今一歩の處で足をふみとどめる。俳優ではジャン・ギャバンでは線が太すぎる。アンナ・ベラでは湧き出る情熱が感ぜられない。只密偵の演技に敬服する。然し此の映畫にはリヤリズムの勝利がある。そこに高き價値が認められる。(H)

○映畫に於ける觀客と、現代に於ける青年との比は等しい。と言つたら怒るか。僕はジェームズ槇ではないから、なるべくこんな氣取つたことは吐きたくないのだが、帝劇を出るときつくづく考へさせられた「地の果を行く」は冷靜な頭で見て見ろ、あれはどうにもならぬ分裂のぎりぎり一杯を、やつと結び合せた驚くべき——さうだ怒鳴り散らすべき映畫だ。エゴイストの批評家も觀客もすこしは腹の中で自分を淋しく思つたらう。部分的に見て水準を拔くところのあるのは認める。が、そんなものも最後に近く變てこな結び目を見せつけられては我慢がならない。些末なことをひつ張り出して論じ盡した氣の批評家や、それを擔ぐ觀客共は、當然「どうにもならないもの」と諦觀した「どうにもならない」奴等だ。流行の青年論は映畫批評に關心あるものの項門の一針(SH)

○若し獨斷的な寸評を許して貰へるとすれば、私は斯う言ひ度い。「モロッコ」は夢の世界であり、「外人部隊」はエキゾティシズムの誇張であり、「地の果を行く」はエキゾティシズムに現實的な色彩——人間的な合理性——の流れこんだ作品である、と此の事は勿論斯うした言ひ方によつて監督の優劣を言はうとするのではなく、同じく背景を外人部隊に取つて描いた映畫と言ふ點で、幾らかなりとも作家の眼を其の色彩の中に覗かうとするだけである。「地の果を行く」は技巧的な極所を握つた作品である事からは、かなり高く買はれて良いと考へるが、惜しい事にテーマの通俗性が邪魔して居るのは否定すべくもない。聞く所に依るとデュヴィヴィエは此の映畫の爲にモロッコにロケした相だが、其のエキゾティシズムの點に於ては、「モロッコ」「外人部隊」に及ばない。此の映畫は映畫そのものゝ價値としてよりは、寧ろ映畫のリアリズムとエキゾティシズムの關係に重大な示唆を與へた事で、より多く注目されるべきであらう。最後に映畫作家は、今日以後如何に描くべきかの追求と共に、何を描くべきかの問題を考へて行かなければ映畫の價値は考へ得ないと言ふことを警告して置きたい。(I)

○「地の果を行く」に於て、兎も角もデュヴィヴィエに賛辭を呈せねばならぬのは、彼がラストシーンを映す場合に、ともすれば、リアルより遊離しようとする感情の高潮を、終に押へ切つて、最も單純化されたフォームに於て大芝居を演じて呉れた點であらう。(F)

好色一代男再見

竹村次郎

作者が如何なる目的態度で作品に臨んでも出來あがつた作品が時代を劃するが如きものである場合には、作者の心理を善的に美的に解釋しておよそ合理的なものにまで變じてしまひ勝ちなものである。然も時代は益々此の傾向を助長し、作者は理想的人物化され執筆せんとする時の心理は時代的意義を附加されて、青白いヴェールの奥深くに儼然とまつられようとしてゐる。

一代男跋文の「轉合書」が何を意味し、作者が何を目的として、否如何なる心理で一代男をものしたかは、しばらくおき卷七「未社らく遊び、今のかほる裝束好の事」の一段をふりかへつてみよう。

棕梠箒に、四手切て、

四手は便船集に

四手　壇、地祭、神馬、水口祭

と記されてゐるやうに、神祇に用ゐるものである。されば棕梠箒に四手をつけたのは地祭の心であつて、面白おかしく又間違ひのなきやうにと祓の意味を含むと共に、物事を初めるにふさはしい氣持からの結果ではなかつたか。增補はなひ草に

夏冬、神祇、釋敎、……等は一句ニても不レ苦。三句迄もつゞくべし。

大黑惠美酒を指出す。

四手に對して大黑惠美酒はかくして續けられた。季吟の山之井に

子祭は子の日、大黑のおほたけにうちそへて。惠美須を

もまつり侍まづ其曉かたに。陰陽師のうりあるく。ゑびす大黑の繪像をいはひこめて。まめの供物に。二またの大根そへて備へ侍る。

四手を出してふつた所から十一月の子祭ー大黑の御火燒を聯想したのであらう。

懸小鯛見せければ

惠比須樣に鯛、これはすぐに聯想される所である。然し特に正月の季の懸小鯛を持ち出したに就ては、永代藏に

掛鯛を六月まで荒神の前に置きけるは。

と述べられてゐるやうに、竈あたりに掛け古されたものを咄嗟の必要物であるだけに持ち出したと想像される。

炮烙に、釣髭を作り出せば、

判り兼ねる一節だ。懸小鯛が正月故に此も春と解釋すれば次の「三社の託宣」も春となつて來なければ

春秋は三句より五句迄もつゞくべし。

に外れることになり、殊に後に正月の事が出るに於ては迷はされる。然し、此所が談林俳人と無理に解釋すれば、大阪の年中行事の十日戎であらう。即ち、この日は恰かも今日の酉の市に於る熊手の如く、惠比須樣にかたどつた、かうした人形ー柱懸けが盛んに賣買され、熊手同樣に緣起をかつぐ花街、商人に喜こばれたのではなからうか。

三社の託宣を拜ます、

三社の託宣に就ては輪講に出てゐるから省略するが、前の釣髭との間にいくばくの必然性があるのであらうか。不明ながら想像するに、炮烙に釣髭をつけたやうな柱掛けが、厄祓ひ商賣繁昌と緣起を祝ふものであつてみれば、惡魔惡氣祓ひの託宣との間に談林の心付に於るが如き關係の認められないことはない。

かな槌を出す、

託宣を拜ますとあるからには誰かゞ手にぶらさげたか或は何かに引つ掛けたのであらう。されば、釘にかけろとばかりにかな槌を出したのである。

懸燈蓋に、火ともしてみせる、

かな槌から吊すもの、懸燈蓋は斯くして持ち出された。「火ともしてみせる」心は、盆、正月、或は特別の佛事などがあるとて佛壇を掃除するとか、燈明だ線香だと色々さうし

た佛事の準備を「かな槌」と共に表現してゐるものと解される。

佛に頭巾着せて出せば、

如來様に頭巾を着せて出した。卽ち、前の懸燈蓋を看經の準備とみて、此所では、浮世の俗事を離れて念佛ばかりの閑居三昧にひたつてゐる隱居を示したのである。佛は勿論人佛の意味であらう。

釣瓶取を出す。

佛に頭巾を着せたもの、それは念佛三昧の隱居の姿である。釣瓶取はかゝる人の簡素な生活を象徵するものとして取り出された。或は穿ち過ではあるが、

佛　清盛の妾、佛のはら、難波……

の清盛の妾、佛御前の嵯峨野に於る出家生活或は謠曲佛の原に描かれた佛御前の有様を描き出したとも見られるであらう。兎も角、出家に釣瓶取は、一代男輪講の如き聯想によるものではなく、所謂心付によるものと私は言ひたい。

末那板みすれば、

釣瓶取から次の牛蒡までは俳諧の居所に屬し

一句ニても不レ苦、三句迄もつゞくべし。

に從つてゐる。上方一帶の井戸は所謂內井戸であつて、通り庭の途中又は突き當りに竈、炊事場などと續いてゐる關係上、釣瓶取井戸と言へば炊事場を聯想しがちだ。

牛蒡一把、みせ懸る、

前のと同様に炊事場風景である。俎板から料理、そして有り合せの牛蒡を出したものと思はれる。

猫に大小指せて出せば、

牛蒡から炊事場、炊事場から猫へと聯想されたのであるが大小をさした猫は何を意味するのであらうか。考へるに牛蒡一把さし出して見せた異様な腰つき、手つきそれが住吉の人形の猫に似てゐる所から思ひついて、茶化したのであらう。然も住吉の人形を使はなかつたのは、前の炮烙に釣髭と同じく、それとさとらす所に笑ひを求めようとしたからである。

干鮭に、齒枝くはえさせて見する、

猫から鰹、鯡等の魚類—鮭となつたのであるが、此所では猫に大小を猫に傘、猫に小判同様の諺として取あつかひ、

此に應酬するものとして干鮭に齒枝を使はした。その心理は干鮭は鋭い楔形の齒をむき出してゐる。人間ならば食後楊枝を使ひたい所だが、悲しいかな魚だ……似合ぬ、用に立たぬの積りか、或は齒ばかりむき出した營養不良の貧乏人を象徴した干鮭であるか、ともあれ諺の應酬による笑ひをねらつたのである。

炭けしに、注連縄はりて出せば、

冬の季に屬する干鮭は、正月も間近しの感を與へるであらう。注連縄はこの聯想から出たものである。山之井に

かやかちぐりをうり。たてまつ。ゆづり葉もてありき。

せきぞうのやかましく。借銀こひのせはしなくゆきちがふおほぢの氣色。……かずのこあらめのやうの物。鯛鱸などてうじをく。其ほど〳〵の家々のまうけ。云々

と歳暮の狀を述べてゐるが、次の醬油の通ひと共に、この大晦日を描いてゐる。

烏帽子着て、あたま指出せば、

炭けしに迄注連縄をかけて正月準備の忙しさを示し、醬油の通ひによつて掛取りの頻繁を象徴した大晦日も明ければ長閑なお正月だ。節分の厄祓ひの聲は何時しか扇は〳〵若えびす〳〵の聲となつてゐる。烏帽子着た男は、此等正月になくてはならぬ大和の猿司、西の宮の戎まはし等を象徴したものである。

十二文の、包錢を投る、

便船集に

烏帽子　ゑびす、猿、彌宜、白拍子……とあるが、十二文が何を意味するか判らない。或は彌宜か或は猿引か、孰れにせよ當時の正月の景を描いたものだ。

摺粉木に、綿ぼうしまいて出せば、

廓に於て太夫、天神の揚代が大體定まつてゐるやうに干瓢惣嫁に至るまで、先づ相場が定まつてゐたのであらう。十二文はその孰れに當るか判らないが、大したものではなかつたと思はれる。摺粉木は、斯る女遊びになくてはならぬものを暗示したのである。

上々吉子おろし藥あり、同日やとひの、取揚婆々もあり

と、書てみする、

前の摺粉木からは所謂戀の句の格である。

戀の句に至りて……よみにくき、びらう千萬なる詞は斟酌可レ在」之物也。（誹諧初學抄）

を思ひ合す時、矢張談林俳諧の戀だといふ感が深くなる。

簇天蓋、葬禮の道具を出せば、

簇天蓋や葬禮の道具で葬式を具體化したものであるならば取揚婆々から、生れる死ぬを聯想した結果と言へるであらうし、單なる死を現はすものであるならば、子おろし藥―墮胎からの聯想と解釋される。

以上、要之するに此の遊びは文字の遊戯たる俳諧を眞の娯樂物にした形式であつた。十七字十四字でつゞけるかはりに、物によつて續けようとする俳諧だつた。再に言へばよむ俳諧、聞く俳諧を見る俳諧に變じたものであつた。

俳諧はやさしくおかしくの貞門俳諧を、俳諧は滑稽なりに置きかへて大阪町人の素養にまで食い入らしめた宗因の談林俳諧が、滑稽文學として完成されるにつれ、益々俳諧は娯樂物だの觀念を增大せしめたのである。

泣やら、大笑ひやら、……いづれか腰をよらざるはなしこれが大阪談林の特徴であり、彼等のねらつた所である。そして西鶴は、この氣運を巧にとらへて、小說に於て俳諧を娯樂物にした場合の一例を示したのである。彼の心中、この點に於て得意なるものがあつたであらう。

兎もあれ小說家として獨立した西鶴は、その初期に於て談林俳人が俳諧に向つたと同じ態度――轉合書の態度をとつてゐた事は否定出來ないであらう。芭蕉の正風に於るが如く生活に卽した眞摯の筆をとるに至つたのは、一代男でも二代男でもなかつた事を附加して筆をおかう。

第四號　原稿募集

● 寄稿者は國文學會々員並に會友に限る。

● 日本文藝に關する研究・批判・資料紹介・ブックレビュー・隨筆・映畫演劇評の如きもの。

● 枚數は十五枚以內。

● 十二月十日迄に國文學會宛送付のこと。

江島其磧の父と祖父の存在に就いて

——恩師石割先生の靈に捧ぐ——

工藤武富

其磧に關する傳記的記事の收錄されてゐるもの、默老の京攝戲作者考、馬琴の著作堂一夕話、一鳳の傳奇作書等二三あるが、いづれも簡を極めて、其磧の閲歷と環境、風貌と精神の片鱗を傳へるものとては、京攝戲作者考あるのみであるが、それも他とは類型的關係にある。

系累的事項は殆ど空白で、子に其跡と云ふのがあつて、有名な八文字屋自笑との確執後、市郎左衞門の名を讓つて江島屋と號する本屋を經營させたと云ふ事實が、知り得ざる世界と一線を劃してゐる。子の存在は當然その母を豫想しなければならぬが、多の傳記的研究の型に洩れず、詳かでない。勿論其磧の父と祖父が如何なる性格と素質、教養と經歷とを持つてゐたか、彼に關する僅少の生長と環境との知識を以てしては、一片の記事をも、沈潛喪失してゐる記錄の奥底から拾ひ出すことが出來ないのである。

たま〳〵書を涉獵してゐた折に、ふと其磧の父と祖父らしいと推定を下し得る人の存在を記錄してある事實に觸れたが、そのまゝ吟味もへず取上げて報告發表しただけでは事實の脆弱性が問題になるし、自身へも的確な自信のある事實として受理したかつたので、いさゝか考證的推定をして見る氣になつたのである。

貞享二年版の京羽二重に大佛餅を販賣してゐる店舗として、次の三ケ所が擧示されてゐる。

大佛正面すぢ角

五條橋通寺町西へ入町

柳馬場せいぐわんじ通角

前記の戯作者考その他の傳記錄によれば、其磧の家は誓願寺の前にあつて、昔から大佛餅を販賣してゐた老舗と云ふから、京羽二重に記載されてゐる「柳馬場せいぐわんじ通角」の大佛餅屋がそれであらうと思はれる。戯作者考には、誓願寺前の大佛餅屋より後に、洛東の方廣寺の前にも大佛餅屋が出來て非常に流行し繁昌したため、前の餅屋は大打撃を蒙り業を轉じたと云ふが、果して轉業したのが事實ならば、京羽二重に示された事實卽ち貞享二年以後の事でなければならぬ。「大佛正面すぢ角」の餅屋がその新興の餅屋で、貞享初年頃には尙この二店が併立して商戰上に拮抗對峙してゐた樣に思はれる。然し始め大佛餅屋の名稱を得てゐたのは其磧の店舗のみであつたと云ふ事、これは小論にとつて重要なキーポイントであつて、この命題を證據づけるのに雍州府志の記事を引見する。餅と云ふ條に、

處々店製レ之其中京北渡邊道喜並道和五條御影堂前方廣寺大佛殿前店製レ之但稱二大佛餅一家者誓願寺前在レ之外不レ聞レ之各形色風味爲レ勝栗餅北野茶店爲レ佳　とある。

御影堂と云ふのは、五條橋通寺町西へ入町に在（洛陽名所集）る、卽ち、府志の御影堂前の店は、京羽二重の五條橋通寺町にある店と、同一店であり、方廣寺大佛堂前の餅屋は、二書ともに之を記錄してゐるのであるが、注目すべきは府志で外不レ聞レ之と、特に大佛餅と稱して世人に傳聞されてゐたのは誓願寺前の其磧の餅屋であつたと云ふことを、明白に指示してゐる事である。

方廣寺大佛前の新興の餅屋が、後年大佛餅屋と稱して獨占的な絕大な名聲を博してゐたことは、近代世事談（享保十八年）その他に依つてもうかがはれるし、貞享時代にも大佛前で製造發賣してゐたのであるから、大佛餅屋と稱してゐたことの想像が可能である、京羽二重に大佛餅屋として三ケ所の一つに擧げられてゐるのは理由のないことではない、が推考せれるのは、方廣寺前が誓願寺前を模倣追從したと云ふことである、この想像は世事談に「根元は京誓願寺前にて」とあり、戯作者考にもその由が記述され、府志などによつても、單なる想像の境界を超越してゐる確然たる事實だと認められる、反芻的に强調したが、要は少く

とも貞享時代迄は、大佛餅と云へば必らず世人は誓願寺前を聯想したと云ふことが明瞭に確認されればよいのである

北藤浮生の滑稽太平記に、玉海集難書の事として次の話が出でゐる。

安靜三ツ物の組に、俊秀といへるは、大佛餅屋庄左衞門といふ人なり。彼の玉海集に難書して、流布せんといへり。是は俊秀父家久が連歌を嗜て昌琢と會出座せしに他人の句を昌琢をさしおきて、指合をくる事度々に及り時に昌琢云く餅は餅屋がよし、指合のことは此方にまかせよと有しを、毛吹の難書氷室守に正式が書たりし、俊秀、正章を深くうらみて、玉海の難書を思立しと聞へけり。されば俊秀は正章に殊文能因で彼が非を見出さんとさまぐ〳〵の事迄も手帳にしるしとめて、季吟門葉山鬼（岡カ）元隣と評議す。然るに此頃正章に知らせつる人有りしかば、正章は門葉布類屋政信に能言含め、俊秀が許に遣し、四方山の物語數刻に及で、政信が曰く、誠や玉海の難書を貴方の致さるゝと風聞せり。昨日今日迄師弟の如く賴母敷、貴方と正章の中なりしを、今更心を變じ、斯く耻辱をあたへ給はん事、和歌の道にも有まじ、仁義にも漏なん、あまり情なき事にあらずや、名人人を不謗と有をや。我に由て思留り給へかしと云ふ。俊秀聞て中々思ひよらず、誰人の雜談にや、と取合はず、されども政信種々にこしらへて、無事に及へば是非なく思ひ留りぬ。又依之玉海集を他言集とは言へり。

荻野安靜門下の俊秀と云ふのは、大佛餅屋庄左衞門と云ふ人であつたと云ふ、私はこの俊秀が其磧の父であり、家久なるものがその祖父であつたと信じてよい理由を、既に大佛餅は誓願寺前であると云ふ結論に發見してゐる。

里村昌琢が歿したのは、寛永十三年であり、池田正式が氷室守を著したのは正保三年であり、安原正章が玉海集を編んだのは明暦二年であつた、ほゞ年代的に事件を連鎖考定してみても、寛文七年生れの其磧の父として祖父として二人の存在は何ら矛盾背馳するところがない。

俊秀が俳諧をたしなみ、家久が連歌の好事的愛玩者だつたと云ふこと、家久が昌琢から餅は餅屋がよしと、揶揄と皮肉の針をさされたと云ふことは、其磧の家が巨萬の財産

を擁してゐた餅屋であつたと云ふことから、如何にも含蓄のある適切なアイロニーとなりサテイヤとなつてゐるし、彼我照應して充分に事實として諾ける事である、彼等二人が、其磧の父祖であると推定するに間然するところはないと思ふのである。

この事實に依つて老へて見ると、子孫の其磧にいたつて驕奢的生活に投じ、遊廓通ひに莫大な財産を蕩盡してしまつたと、多くの傳記研究家に信ぜられてゐるが、それ以前の經營困難と終局の破産にみちびいた決潰の萠芽は、既に貞享以前の同業者の壓迫と、町人にふさはしからぬ父祖の風流な文人的生活の結果による營業怠慢とに胚胎してゐたと見るべきである、勿論、その直接的原因は、傾斜に惑溺して家運の沒落の氣運を無視して無反省な沒入の態度をとつた其磧にあつたことであらうけれども。

父と祖父とが文人的生活をしてゐたことを知れば、其磧の其磧と云ふ名が俳號であつて、彼が俳諧を嗜み文墨に心を寄せたのが、その生活環境の生んだ人生的な配合であることを理解するのに困難はない、其磧が破産後居を移し、自己の文才の有無を自覺して遂に八文字屋と提携し、評判記、浮世草子、脚本に筆を取り、數百部の作品を積成して德川文學に於ける未曾有の八文字屋本の黃金時代を現出せしめたのも、單なる人生的遇然の結果ではなく、父祖から承け幼時から培はれた精神的遺産の所産であることを、人の環境に於ける密接不離な依存的關係を、こゝでも改めて痛感せしめられるのである。

滑稽太平記の記事で不可解な感じを抱かせるのは、俊秀が何故に正章の玉海集を誹謗しようとしたのか理由のないことである、父の家久を嘲笑の種にしたのは、氷室守に於ける正式であつて、傍觀の正章にはいさゝかな關係もない事に思はれる、俊秀が執拗な怨恨と憤懣とを抱いてゐるらしい以上は、正式が「玉海集」の序文に「室（正章）ははやくやつがれがにごり酒のうましのともがきなり」と親密な酒杯の友であることを述べてゐるその親友の故を以て、單純に正章にも飛沫を浴びせたとは思へない深々とした理由と原因が考へられる、然も氷室守の出版されたのは玉海集のそれよりも八年をさかのぼる、八年の久しきにわたつ

て怨恨と憤怒とを心奥に藏してゐたと思ふより、何か直接的な原因が正章自體にあるのではないかと考へたことが、たまたま玉海集に、俊秀の

雲の上や月も桂の院の御所

と云ふ句が一句しか選拔されてゐない事實に思ひ及んで一つの想念を得た。

揣摩憶測の誹は甘受するが、文面に於ける布類屋政信によれば、正章と俟秀の間には、師弟に近い親しい交渉が保たれてゐたと云ふのに、正章は俊秀の句を僅か一句入選せしめただけである、勿論、そうした選擇は私的情實に煩はされてはならないが、その直情的遂行の間隙に俊秀に不純な素朴的な憤怒と不滿とが湧いたと見るべき可能性が多分にありはしないか、即ち、玉海集は全國の作家六百五十八人、發句數二千六百廿餘句、付句數は五百八十四句に達する尨大な大部冊をなしてゐる、發句數一人宛平均四句に餘る、布類屋政信は發句十五付句十を選入され、正式は發句十八付句二十三、正章自身にいたつては發句二百八十餘付句百餘に上る、諸國の無名の作家にして三句四句の選を受けてゐるものは枚擧に煩をおぼえる數である、かゝる狀態にあつて、發句一句の入選とあれば、俊秀の胸奥に蟠踞してゐた激怒の分析はしてみるまでもないのではないかと思ふ、正章の周章狼狽ぶりもこの想像に有力な加擔をする、後年の其磧と自笑との確執に思ひをはせて、遺傳的なものゝ威力を考へるのは、精神分析的な獨斷的自悅としても、油然たる興味が湧く。

其磧の父の俊秀と山岡元隣との間に、水魚の交友關係が保たれたらしいのは、一サークルの狹い絡りを思はせて、こゝに端緒を得て緻密な觀察とたゆまざる探求とを以てすれば、新しい事實の收獲をも豫想は出來ようが、それは暫く措いて、更に一歩このレポートの完結へと歩を縮める。

誹諧作者名寄と綾錦とを拔粹する、俊秀が荻野安靜の門下であつたことを確認したいためである。

○綾　錦（菊岡沾涼）

貞德―安京
　　靜　荻野以空軒
　　右同頃
　　　　京　俊秀
　　　同　宗英
　　　同　重隆
　　同　以船

○誹諧作者名寄

（貞德門下は滑稽太平記の記事に關係あるもののみ）

- 貞德
  - 安原貞室撰玉海集
  - 池田正式氷室守作者、大和ノ住人
  - 荻野安靜撰紬布鄙諺集、以空軒
    - 俊秀
    - 重隆
    - 宗英
    - 吉連
    - 及屢
    - 重峯
    - 滿頼
    - 宗貞
    - 不水
    - 定利
    - 玄康
    - 政之
  - 苻類屋政信
  - 松江重頼犬子集懐子毛吹草同追加

次に誹家大系圖の安靜の條のみを拔粹する、俊秀の姓卽ち其磧の姓が村瀨氏であるのは未だ研究家に目睹せられざる事實である、水谷不倒氏は其磧は江島と云ふのが本姓であらうと云はれてゐるが、それは其磧の家の屋號と考へられる。その本姓は村瀨と云つたのであらうと思ふ。

○俳家大系圖

- 荻野安靜
  - 以船
  - 宗英 內本氏京師ノ人
  - 俊秀 村瀨氏京師ノ人
    - 定利 德永氏京師ノ人

西鶴の編纂した俳諧師手鑑の二百四十六人の句の中にも俊秀の句が見出せる、西鶴の「其德其名世にみてる作者」の一人である光榮を擔つたのである。

撫子や草のはらから兄弟　京住　俊秀

同じく永代藏二ノ一に、「餅も利勘にて大佛の前へあつらへ」と書いてあるが、既にこの餅屋は其磧の店ではなく方廣寺前の餅屋で、元祿の冒頭には久しく續いた其磧の老舗も破產沒落して悲境の慘を辿つてゐたのであらう。西鶴の記憶に潛在意識となつて印象されてゐたのは大佛堂前の餅屋であつた、兎角、西鶴が俊秀を直接的なり間接的なりに知つてゐたとすれば、其磧と西鶴の文學史上に於いて結んだ血族的關係を思ひくらべて興味を覺えるのである。

〈編輯後記〉

本會の編纂顧問として、私達を常に指導、激勵して下さつた石割先生が、御病氣、續いて御入院との報に接し、學會全員は先生が一日も早く快くなられて學會の爲に盡して下さる日を心から祈つてゐたのであつたが、六月二十九日遂に長逝されたことは實に千載の恨事である。こゝに於て本會は先生を追慕措く能はず、かねての計畫を變更して、新學期に際し「石割松太郎先生追悼號」を編んで、先生の靈に捧げることゝなつた。

本號編輯に際し、御生前親交あつた方々にも追悼の記事をお書き願ふことゝなり、種々御無理をお願ひした。特に夏の休暇中の爲、手不足もあり、不行屆きであつたにも拘らず、本會の主旨に御同情下さつて、大方の玉稿を戴けたことは感謝に堪へない。御執筆下さつた方々に厚く御禮申上げる次第である。

石割先生の專攻が德川文學であられた關係上、研究論文として、竹村、工藤二君のものを載せた。先生も滿足して下さることと信ずる。

本號より新しく「國文學研究」の批評欄を設けた。お互の國文學研鑽上、貢獻するところ多大であらう。今後の熱ある批評を期待してゐる。

本號の編輯を終つた今、先生の御冥福を祈る氣持で一杯である。

文藝と批評　第三號

昭和十年九月廿日印刷納本
昭和十年十月六日發行

東京市淀橋區西大久保三ノ八
編輯兼發行者　稲垣達郎

東京市淀橋區下落合一ノ一八
印刷所　祖谷印刷所

東京市淀橋區下落合一ノ一八
印刷者　石崎宗一

東京市淀橋區早稲田六學文學部內
編輯兼發行所　早稲田大學國文學會
振替東京二七〇七三番

發賣所　東京日本橋　丸善株式會社

（年四回發行）定價二十五錢

昭和十一年九月廿九日印刷納本　昭和十一年十月六日發行　第一卷　第三號

定價二十五錢